

希望を託した戦士のヒーローアカデミア

白華虛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

希望を託され、絶望に抗い続けた戦士、孫悟飯。

彼は……人造人間17号、18号との激闘の末に弟子であるトランクスに全ての希望を託して、その命を落としてしまった。

しかし、彼は別の世界に再び生まれ落ちて、希望のヒーローになる為に奮闘することとなる。

孫悟飯の第二の人生が、今ここに紐解かれる。

※あくまで地球人の肉体なので、前世に比べたらだいぶ弱体化しています。アンチも有りますのでご注意ください。

目 次

1 話	孫悟飯、転生				
2 話	孫悟飯：オリジン（前編）				
3 話	孫悟飯：オリジン（中編）				
4 話	孫悟飯：オリジン（後編）				
5 話	いざ挑め！雄英入試！				
6 話	合格を目指して！解き放て、超かめはめ波！				
		77	67	48	24
		12	1		

1話 孫悟飯、転生

ここは、とある世界の地球。

この地球には、かつて孫悟空という名の戦士がいた。

彼は、かつてフリー・ザという宇宙の支配を目論む悪の帝王に滅ぼされた、宇宙最強レベルの戦闘民族、サイヤ人のれつきとした生き残りだ。彼は、出身地である惑星ベジータを滅ぼさんとするフリー・ザの悪意を感じ取った父親と母親によつて地球上に送られ、結果的に生き延びた。

悟空は、幼い頃に頭を打つたことでサイヤ人の凶暴性を失い、育ての親や師匠のおかげもあつて素直で純粋な少年として成長した。彼は、ブルマという少女との出会いをきっかけに旅に出て、世の中を知つた。その中で、様々な仲間やライバル……そして、敵達と出会つた。

幼き頃のピッコロ大魔王との闘いをきつかけにして、悟空は凄烈な闘いの渦に身を投していく。

幼き頃に撃破したピッコロ大魔王の息子、通称マジユニアとの闘い。

その数年後にやつてきて、己の息子を攫さらつた実の兄、ラディッツとの闘い。

更にその後にやつてきて、ラディッツよりも遥かに強大な戦闘力をを持つサイヤ人、ナツ・パとベジータとの闘い。

これら日々の修行を通して、悟空は1人の屈強な戦士としても成長した。強い相手と闘うことを楽しみとし、絶対に負けない為に闘う。彼は、そんな男だった。

その強さが花開いたのか、彼は因縁の敵であるフリー・ザを撃破すると共に、サイヤ人達の中では1000年に1人現れると言われる、伝説の戦士……超サイヤ人に覚醒し、新たな強さの領域に足を踏み入れた。

フリー・ザとの闘いの舞台であつたナメック星は爆発を遂げ、悟空もそれに巻き込まれて死んだかと思われていたが、彼は生き残つた。地

球に襲来した、体をサイボーグ化して復活を遂げたフリーザとその父親であるコルド大王を、地球に駆けつけて撃退するという形で彼は生還を遂げたのだ。

誰もが、これから彼と共に在ることを信じて疑わなかつた。仲間同士、ライバル同士として高め合い、敵が現れた時には闘いに赴き……そんな生活を彼と共に送れると思つていたはずだ。

しかし。悟空はウイルス性の心臓病に体を侵され、この世を去つてしまつたのだ。無論、彼の仲間達は黙つて彼が死ぬのを見ていた訳じやない。彼らなりに何かやれることはないかと模索していたはずだ。だが、地球を脅かす脅威を打ち倒して来た戦士達であつても、病気を打ち倒すことは出来やしないし、心臓病を治すに値する技術も存在しなかつた。

まさに万事休す。手の施しようがなく、悟空はあまりにも早すぎる死を迎えてしまつたのだつた。

……余談だが、この世界にはドラゴンボールという、7つ集めれば神龍シェンロンが現れ、どんな願いでも叶えてくれる不思議な球がある。これは文字通りに、どんな願いでも叶えてくれるのだ。100万円が欲しい、と言えば本物の100万円が出てくるし、若返らせて、と言えばその通りに若返させてくれるし、不死身にしてくれ、と言えば文字通り不死身になる。

こんな魔法のような道具が現実にあるとしたら、江戸時代の厳しい身分制度の中で不満が募りに募つた百姓達や、絶対王政下で君主に支配されていた庶民達にとつて重宝する物となるだろう。いや、それどころか全人類がそれを欲しがり、戦乱の世の中に陥るかもしれない。特に、ヒトラーやスターリンのような独裁者がこれを手にしたらどうなるのか……ということは考えたくないものだ。

どんな願いでも叶えられるのだから、当然死んだ人間でも生き返らせることが可能だ。実際、悟空達もそんな風に悪人に殺された人々を生き返らせた経験がある。ならば、何故悟空を生き返らせるすることしなかつたのか。否、‘’しなかつた’’のではない。正確に言えば、‘’出来なかつた’’のだ。

ドラゴンボールによつて死んだ人間を生き返らせることが出来ると言えども、条件がある。生き返らせることが出来る人間は、外的要因で命を奪われた者のみなのである。例えば、交通事故で亡くなつてしまつた人だとか、誰かの手によつて殺されてしまつた人だ。だからこそ、ナメック星でフリーザに殺された者達は皆生き返つたし、ナッパに殺されたピッコロもナメック星のドラゴンボールによつて生き返ることが出来た。

それ故、病気や寿命などといった要因で死んだ人間を生き返らせる事は不可能なのだ。病気の方は人間の手でなんとか出来ることであるから、そんな物を頼らずとも何とかしようと……寿命の方は、決まつたことなのだから天命を覆すなど……そういつた神からのメッセージなのだろうか。

閑話休題。悟空が永遠にこの世を去つてから然程時間も立たないうちに、地球は新たな脅威によつて、危機に瀕した。その脅威というのが、人造人間17号と18号。悟空の暗殺の為に造られた、いわばサイボーグである。

この2人というのが、あまりにも強すぎた。彼らの強さは、サイボーグ化したフリーザを超えて、更にそれを超えてきた超サイヤ人の悟空すらも軽々超えてしまう程なのだ。当時、事実上で言えば宇宙最強は悟空であつたも同然だつたが、彼と同等に立てる強さの者は誰一人居なかつた。残酷な性格の2人は、ゲーム感覚で人々を殺すことを楽しんでおり、地球上に生きる人々は次々と殺されていく。そんな彼らの悪行を止める為、悟空の仲間達は立ち上がつた。

しかし、その試みはあまりにも無謀であつた。蟻が恐竜に挑むようなものであり、戦士達は次々と殺されていく。地球の神の半身とも言える存在だったピッコロ（かつて悟空と鬭つたマジュニア）が死んだことで、地球の神も消えてしまい、最後の希望であつたドラゴンボールが使えなくなつてしまつた。

悲劇はそれだけで終わらない。自分を鞭打ち、血反吐を吐くような修行の末によつやく超サイヤ人に覚醒して悟空と同じ強さの境地に立つた、彼のライバル……ベジータも奮戦の末に殺されてしまう。

戦士達は次々と息絶えてしまつたが、彼らの希望が完全に途絶えた訳ではない。今日もまた仲間達の仇を取る為、絶望を終わらせる為に反抗を続ける戦士がいた……。



暗がりの空に覆われた街中。雷鳴が鳴り響き、雨が降り注いで、地面の水溜りに波紋を作つてゐる。これから起きる不吉なことを暗示するかのように、なんとも重々しい天氣だ。

止めどなく降り注ぐ雨が、1人の戦士に訪れる悲惨な運命を嘆いた女神が流してゐる、涙のようすら思える。

決戦の舞台は街中と言えど、辺りの建物の多くが崩れ去つてゐる。上から半分がなくなつていて、逆に下から半分がなくなつて、上半分が地面に崩れ落ちてゐる物もある。また、地面には多くの瓦礫が散らばつていて、道を完全に塞いでいるところさえもある。その様は、大災害に見舞われた後の大都市と例えるに相応しい。

空を裂くように瞬く雷光が、決戦の舞台に立つ3人の顔を照らす。首までの長さのある黒い長髪に、黒いTシャツと白い長袖のシャツと首元に巻きつけたオレンジ色のスカーフ、水色のジーンズが特徴の少年。彼が人造人間17号である。腰にホルスターと自動拳銃を備えた優男風の見た目だが、悟空の仲間であつた屈強な戦士達を何人も屠つた男。人を見た目で判断してはならないという典型的な例だ。

その隣にいる端正な顔立ちをした金髪で、青いジャケットとスカート、ジャケットの下から覗く白い生地に黒いストライプの入つた袖のシャツが特徴の少女。彼女が人造人間18号。17号の双子の姉である。

両者ともに服の一部が破れてボロボロになつておらず、髪型も乱れて

いる。ここまで繰り広げられてきた闘いの凄まじさが分かるだろう。

そして……2人と対峙する、金髪に碧眼の青年。彼は左腕を失つているものの、1人の戦士としての逞しい立ち姿であり、頼りなさなど一切感じさせなかつた。額の左側から左頬にかけては傷痕が残つており、特徴的なのは背中に、飯、と刻まれた山吹色の道着だ。

彼の名は孫悟飯。かの孫悟空の息子であり、多くの戦士達に希望を託された者。普段の優しい目つきは、超サイヤ人に変身していることもあつて鋭く、その双眸には2人の人造人間を本気で破壊せんとする意志が感じ取れる。

彼もまた、かつての戦士達のように1人の少年に希望を託し、己の死を覚悟してこの戦場に立つていてる。

仲間や人々を殺された怒りを燃料にし、闘志を燃やした悟飯は強かつた。この片腕である状況を物ともせず、2人の人造人間を一目見れば、圧倒していた。その末にようやく人造人間達の服をボロボロにするまでに至れたのである。

(この調子ならいける。必ず押し切れる……ここで、終わらせるんだ！)

悟飯自身、このままならば撃破も不可能ではないと踏んでいた。
……しかし。やはり人造人間達の強さは侮れない。

2人の人造人間はアイコンタクトを取つて頷き合うと、同じような構えを取つた後に悟飯に向けて駆ける。そして、その距離を詰めると拳撃のラツシユを放つてきた。

片腕のみで何とか彼らの攻撃を捌いていく悟飯だが、攻撃のスピードがそれまでを凌駕している上に、2人の息が恐ろしくくらいにピッタリであつた。互いのやりたいことを把握しきつていてるし、攻撃のタイミングもズレなく合わせている。元々、血の繋がつっていた双子の姉弟だからこそやれること。これぞ、阿吽の呼吸だ。

一人一人の本気が悟飯を凌駕しているのだから、彼らがやる気になれば、悟飯がどうなるのかは分かりきつたことである。

「ぐあっ！」

2人が同時に繰り出したフックで吹き飛んだ悟飯は、更に吹き飛ん

だ先に回り込んだ17号のドロップキックによつて地面に叩き落とされてしまう。

背中を強打したことで肺の中の空氣を吐き出させられ、地面にはたき落とされた羽虫のように身動きの取れない悟飯に、17号と18号は最後の攻撃を叩き込まんとする。

「終わりにしてやるよ、孫悟飯。正直しつこくて仕方がなかつた。でも、もうお前の顔を見ることもない。そう思うと清々する」

17号が、自分の掌を悟飯の方に向けながら言う。本人の言う通り、悟飯の存在が余程しつこかつたのだろう。ゲームにおいて、今まで自分の苦戦していたステージを何百、何千回とやつた末にクリア出来た時のように彼の笑顔は爽やかだつた。

「随分と粘つたけれど、もう終わりだよ。安心してよ、すぐにお仲間の所に送つてあげるからさ」

18号も彼の隣に立ち、同じように悟飯に向けて掌を向ける。悟飯に死を宣告する彼女の発言は、まさに死神そのものだ。

……そして、彼らはエネルギー弾を悟飯に向けて無数に繰り出すことで、今もなお降り注ぐ雨以上に強く、激しいエネルギー弾の雨を降らせた。

「ぐあ……ああっ……！」

業火のように燃え盛つていた悟飯の命の灯火が、今まさに風前のそれと化す。その勢いを失くし、冷風に晒されて今にも消え去らんとしていた。

自分の中の何かが切れて、体中の力が抜けていくことを感じ取つた悟飯は、自分の死を察した。

死の間際の人間には、お迎え現象というものが起ころるが、悟飯はそれを体験していた。今、目の前に既に死んだはずの父親である悟空や、かけがえのない師匠であるピッコロがいるのだ。

2人とも、誇らしそうな笑顔だつた。「もうお前は十分に頑張つた。よくやつた」と褒めてくれている気さえした。

その最中、急激に体の力が抜け落ちた。超サイヤ人を維持出来る力すらもなくなつてしまつたのだと悟つた悟飯は、希望を託した少年で

あり、弟子でもある、あのベジータの息子……トランクスのことを見つた。

（トランクス……すまない……。オレはここまでなのようだ……。地球の平和はキミに託した……！キミならやれる。キミは、戦闘民族サイヤ人の王子だった、ベジータさんの血を引いているんだから……！キミが……最後の、希望だ……）

己の弟子に希望を託した悟飯の脳裏に浮かぶのは、母の顔。今も自分の帰りを待ってくれているであろう彼女に内心で謝罪の言葉を溢しながら、彼は完全に意識を閉ざした。

……孫悟飯は散った。全てを託された1人の戦士として、その希望を弟子に託し、彼は闘い抜き、命を散らした。若者としてあまりに悲惨な人生を送ったが、彼の人生は1人の戦士としてまさに誇り高いものであった。

彼の意志は今、1人の少年に……トランクスに受け継がれたことだろう。



遙か彼方の地平線まで夜が広がっているかのように閉ざされた意識の中、悟飯は再び悟空とピッコロの姿を見た。

悟空は悟飯に歩み寄ると、彼の頭を撫でながら申し訳なさと嬉しさの混じつた声で言つた。

「悟飯……よく頑張つたな。オラが真つ先に死んじまつたばかりに、全部背負わせちまつてすまねえ」

ピッコロも悟空の隣に並び立ちながら、悟飯の肩に手を置いて、悟飯の師として嬉しさを前面に出した様子で言う。

「弱虫だつたガキの頃が嘘のようだ。本当に強くなつたな、悟飯。お

前は……オレの誇りだ」

自分の尊敬している人達に強さを認めてもらえた悟飯の中に、言い表しようもない程の安堵と喜びが押し寄せて、涙が溢れそうになつた。

今なら、1人の戦士でなく、ただの孫悟飯としても振る舞える気がした。

「お父さん……ピッコロさん……。オレは……ボクは……っ！」

1人静かに涙を流す悟飯を、悟空は抱きしめる。久しぶりに直で感じた父の温もりと偉大さは、悟飯に大きな安堵を抱かせた。

悟飯にとつて、こんなに優しい温もりを感じるのは子供の頃以来だつた。

「あれつ、もう時間か」

今や懐かしい、父の呆けたような声が聞こえたと同時に顔を上げると、悟空とピッコロの体は透けていた。

「もつとお前と話してやりたいんだが……悟飯、オレ達はお前を見送りに来たんだ」

悟飯といふ時間を惜しむように笑うと、ピッコロは言う。

何でも、あの世から悟飯の鬪いを見届けていたのはいいが、彼の命が絶たれたのを目にして、同時に、何者かも分からぬ女性の声が聞こえたのだそうだ。

「彼には、また新たな人生が待ち受けています。お二人が見送つてあげてください」と。そんな声が聞こえたらしい。

その声に導かれてこの真っ暗な空間に辿り着いたことだつた。「詳しく述べられないが、悟飯にはまだ役目があるんじやないか」と悟空が笑いながら言つた瞬間、真っ暗な空間の中に一条の光が差し込んだ。

「あれは……」

外の世界を初めて見た子供のようにして、好奇心に満ちた瞳で光の差し込む方を見た悟飯。

そうしているうちに、この先が自分的新たに歩む道なのだと……彼は不思議とそう思つた。

そんな彼の心情を察したのか、悟空とピッコロは顔を見合わせて微笑み、悟飯の背中を押してやつた。

「行つてこい、悟飯。自分のやること、全部やり終えたらまた戻つてこいよ。オラもピッコロもずっと待つてるからな」

「ああ、また立派になつて戻つてこい。クリリンや天津飯達も向こうで待つているからな」

……昔からそうだつた。悟飯にとつて、悟空とピッコロは自分の背中を押してくれる存在。彼らがいてくれるからこそ、悟飯は強くなれた。

(ピッコロさんにもお父さんにも……まだまだ敵わないな)

そんな彼らの偉大さには一生敵わなそうだ、と思いながら、悟飯はありつたけの笑顔を向けてサムズアップする。

「行つてきます、お父さん、ピッコロさん！」

2人もまたサムズアップで返してくれたのを見ると、悟飯は振り返ることなく光の中へと踏み込んでいく。

「……はは、年はとりたくねえな」

空間の中には、嬉しさに満ちた声を絞り出しながら、眉間を押されては涙を拭う悟空の姿と彼の肩にそつと手を置いてやるピッコロの姿だけが残つていたのだつた。



光に飛び込んですぐ、悟飯は心地いい微睡みに襲われて再び意識を失つた。

ふと目を開けてみると、なんということだろう。凄く安堵した様子のかつての母親そつくりの女性が目に入つたではないか。その周囲を見渡してみると、白衣姿の女性が4人、同じように目に入つた。いずれもおもちゃを買ってもらつた時の子供のようにしてパアアツと笑顔を弾けさせているが……今はどういった状況なのだろうか、と悟飯は思つた。

何一つ状況を掴めない悟飯だったが、次の瞬間に白衣姿の女性の1人が言つた一言で、即座に状況を掴んだ。

「孫さん、産されましたよ！元気な男の子です！」

「おぎやあああああ!!（あ、赤ちゃんに）

まさに驚天動地。この言葉を用いて褒め称えられた、李白の詩文の才能のように驚くべきことである。非現実的な状況である故に、自分の置かれていた状況下ではドラゴンボールが使えなかつたことすらも忘れて、誰かドラゴンボールを使って、オレの年齢を退行させるいたずらでもしたんじゃないだろうな、と疑つた。

悟飯の驚きは産声の大きさにも表れていたようだ。彼を抱える、かつての母そつくりな女性は圧倒されたようにキヨトンとした後に、慈悲深い笑みを浮かべて彼を、壊れ物でも扱うかのようにそつと抱きしめた。

「元気いっぱいだね……。良かった、無事に産まれてきてくれて……」「無事に産まれたみたいだな。よく頑張った、美空。流石オレの嫁さ
んだ」

今度は、かつての父親そつくりな声がした為、美空と呼ばれた女性に釣られて声のした方を見てみると……声のみならず、姿までかつての父親な男性がいた。彼の姿を見ると、美空が彼のことを「悟空さん」と呼んだ為、名前までも全く同じのようである。

（お父さんとお母さんそつくりだけれど……違う。霧囲気は少しだけ
れど、言葉遣いは全然違うもんな）

「お父さんだぞ」と、赤ん坊をあやすに相応しい人懐っこい印象の笑みを浮かべる男性を見ながら、悟飯はそう思った。

ふと、美空が首を傾げながら悟空に尋ねる。

「悟空さん。この子の名前、どうする……？」

彼女に尋ねられた悟空は、悟飯を抱き上げて、かつての父親を彷彿とさせる朗らかな笑みを浮かべて迷わず答えた。

「へへ、ずっと決めてたことなんだ。男の子が生まれたら、死んじまつた父ちゃん、母ちゃんの代わりにオレを育ててくれていた、祖父ちゃんの名前をつけるんだってな。そこに肖あやかつて……悟飯。お前の名前は、悟飯だ！」

白い歯を見せつけ、太陽のかと錯覚する程に眩しい笑みを浮かべて名付けられると同時に、悟飯の中で2人が今世の両親なのだという自覚が芽生えた。

まだまだ分からることは多いものの……これより孫悟飯、第二の人生が始まる。

これは、かつて託された希望を次へと繋いで散った戦士、孫悟飯が誰かの希望となる為にヒーローとして歩み続ける物語だ。

2話 孫悟飯：オリジン（前編）

光陰矢の如し。時が経つのは非常に早いもので、悟飯が生まれ落ちてから、既に15年の時が経過していた。

今世も悟飯は元気に生きている。やはり誰かを守る為には戦う必要があるのだと、彼はとある事件をきっかけに再認識した。そのとある事件の際に、彼は前世の戒めの如く左腕を失い、義手生活となってしまったものの……彼は依然元気だ。

そして、今日も今日とて彼は己を鍛え上げる為の修行を行つていた。

その場所は……彼の自宅に備わつてゐる道場である。木材で建築されており、日本古来から伝わる武道を伝授するそれだと言われても納得すること間違ひな威厳のある建物だ。

広さは、一人暮らしを行う上で豊かな生活を送る為の指標とも言われている 55m^2 程。複数人で修行を行う為に使用したとしても十分な広さであり、悟飯はいつもここを使用して存分に修行を繰り広げているのだ。

因みにだが、その強度は……この世界において、N.O. 1ヒーローだとか言われる男が全力で暴れたとしても、全く損傷が無い程だと建築会社や国が箔をつけている。それ故、彼の家の道場は、ある特殊能力を使用することを許可されている特別な施設でもある。まさに、要塞や戦国大名が建てさせた強固な城だと例えられる強度だ。

閑話休題。そんな立派な道場の中で、悟飯は己の父である、悟空と現在進行形で修行を行つてゐる。

「だあつ！」

「でりやあつ！」

悟空の繰り出した拳を、悟飯は顔を逸らすという最小限の動きだけで避けると、反撃として義手となつてゐる左腕の方で弧を描きながら拳を振り抜く。

悟空もまた、上半身を逸らすことで彼の拳を避ける。そして、その勢いを利用したままサマーソルトキックを繰り出した。まさしく、自

分の体の動き方を完全に把握しているからこそ繰り出せる蹴り。その軽やかさは、まるで風そのものであるかのようだ。

ここまで動きをされると、そのまま彼の繰り出した蹴りが顎に命中してもおかしくないのだが……悟飯には前世の経験だつてある。彼は、これに易々やられる程未熟な男ではなかつた。

自身から見て右の方向にサイドステップした悟飯は、黄色く輝く、掌サイズの球体のようなものを自身の掌に作り出すと、サマーソルトキックを繰り出し終えた悟空に向けて、右腕を振り抜いて球体をゼロ距離のところで命中させんとする。

対する悟空もまた、同じような球体を掌に作り出すと……左腕を振るつてそれを相殺した。相殺によつて、それぞれの作った球体は破裂して爆発を起こす。その勢いを利用しながら、彼らは互いに後退すると、顔の前に両手の手根同士を合わせて構えを取る。

「か……め……！」

技の名前を一音一音発しながら、合わせた両手を体の右側へと移動させていき、それを腰の辺りで停止させる。その移動の最中、両掌の間には生命の力強さに溢れんかのような蒼いエネルギーが集中して、眩く輝く。

その蒼い光は、悟飯と悟空……それぞれの熟練の武闘家とも言うべき、凜然たる顔を照らし出した。

今もなお、悟飯はエネルギーの高まりを確かに感じ取つてゐる。この技は、前世から馴染み深く、何度も自分の力になつてくれた思い出の技。それが今世でも扱えることに悟飯は感謝した。

キイイイイン……という、膨大なエネルギーを集めた発射直前のロケットが放つてでもいそうな音のみが道場に響き渡り、一瞬の静寂が流れる。

そして。悟空が浮かべた不敵な笑みが、技を放つ合図となつた。

「波アアアアアツ！！」

阿吽の呼吸とも言つべき、全く同じタイミングと動作で放たれた技。その名も”カメハメ波”。ユーモアのある技名に乗せて、一直線

に放された蒼い閃光がぶつかり合い、爆弾を凌ぐような轟音を立てながら相殺された。

余程熱量のあるエネルギーなのだろう。爆発の巻き起こつた場所には煙が漂い……それを腕で振り払つて現れた悟空は、息子の成長に対する感心を露わに、笑顔を浮かべた。

「はは、本当に見違えたな、悟飯！ 今じゃオレともすっかり闘り合えるようになつた」

悟飯も、ふうつ、と一息吐きながらはにかんだような笑みを浮かべる。

「いえいえ……誠心誠意向き合つて、オレに修行をつけてくれたお父さんのおかげですよ」

昔からずつとそうだ。他人に対する感謝を忘れないし、常に謙虚である……。悟飯はそんな男だ。

2人が笑い合つて談笑を交わしていると、修行を終えたのを見計らつてか、道場の入り口からチラリと愛らしい人形のように整つた顔を覗かせた美空が声をかけてきた。

「毎朝毎朝頑張つてるね、2人揃つて。そろそろご飯の時間にするよー！」

「おう、サンキュー。汗流したらすぐ行く！」

食べ物に好き嫌いなどない悟飯にとつては、母の作る食事もまた楽しみである。

(修行で程よく体を動かした後の、お母さんのご飯が最高なんだよなあ)

そんなことを考えながら、悟飯は幼い子供のように期待に満ちた笑顔を浮かべて、道場を後にした。



さて、一つ余談を挿もう。

結論から言うが、この世界はかつて悟飯の生きた世界とは全くもつて別の世界である。サイヤ人やナメック星人といった異星人はいないし、人造人間という恐ろしい存在もない。悟飯の置かれていた状況ではドラゴンボールを使えなかつたので、ないも同然であつたが……この世界には、そんな存在も単語もない。

彼の生きた世界も十分に規格外なのだが、今世生まれ落ちた世界は、更に規格外であつた。

この世界の人間達は、総人口の8割が”個性”と呼ばれる特異体質に目覚めているのである。——改めて詳細を明かして言えば、悟飯の家の道場は、この”個性”的”の使用を公的に許可された特別な施設なのである——

所謂^{いわゆる}、超人社会というのだ。人間達は文字通りに進化を遂げ、水や炎を操つたり、風圧を放つたり、剣を作り出したり、単に腕を伸ばしたりと、コミックさながら芸当を行えるようになつたのだと。更に言うと、非常に稀な例だが動物にそれが発現することもあるらしい。

生物の進化について説いたのはダーウィンな訳だが……彼すらも、生物達がここまで進化するなど予想することは出来なかつたであろう。

人間が欲望の塊だというのは俗に言われる事ではあるが、そんな力を持つてみればどうなるかは簡単に想像がつくだろう。

この力を使つて世界を支配したいとか、他を淘汰して自分が好きに生きられる社会を創りたいとか、そんなことを考えて、”個性”を悪用する輩が現れ始める。

人々はそんな輩を恐れ、彼らはいつしか犯罪者となり、敵^{ヴァイラン}と呼ばれるようになった。

そして、そんな輩を知識のある人間が放つておくのかと言われば断じて否だ。

強い正義感や勇気のある人物達が彼らを倒し、人々を”救ける”と

いう偉大な行動を始めたのだ。最初こそ違法だとされていたそれは、いずれ社会的に認められ……そういった行動を取る者を人々はヒーローと呼んで讃えるようになった。

この世界は、そんな架空を現実にした世界なのである。

当然ながら、そんな世界観であることに気がついた際、悟飯は大変驚いた。

一般的に、ヒーローとは普通の人を超える力、知識、技術を持ち、それらを用いて一般社会において有益とされる行為を行つたり、武勇や才智に優れ、普通の人には出来ない事柄を成し遂げる人だとされる英雄や人そのものを指す言葉であるが……この世界では、あくまで敵を取り締まり、人々を救ける行為をする職業のことをそう呼ぶようだ。偉大な行為を行つた選ばれし者のみが呼ばれるはずのヒーロー……。そういう存在があり溢れていることに初めは違和感があつたが、今やすっかり慣れたものである。

何せ、悟飯の身近にはその立場に立つ者がいるのだから。

何を隠そう、彼の父親である悟空はれつきとしたプロヒーローなのだ。自分の事務所を持つており、格闘ヒーロー”武神”として現役活動中である。

彼は、ビルボードチャートJPというヒーローのランキングを発表する番付において、毎回N.O. 4入りを果たしている優秀なヒーローで、いつだって人を救けることに全力を懸ける偉大な人物だ。自分に厳しく、他人には優しい。そんな自分をとことん鍛え上げる武闘家や戦士としての性質も持ち合わせている。その一方で素直で真面目且つ、天然な何処か子供っぽい純粋な一面もある。

それ故か、彼を慕うヒーローや市民達は多く、人気はN.O. 2であるエンデヴァーより遥かに上だし、単純な強さも同じくだ。

悟飯は、本質的に言えばどんな悪人であろうと傷つけたくない、闘うことも苦手な優しい性格をしている。やむを得ない時は闘うものの、俗に言う平和主義なのだ。

敵を倒すヒーローにおいても同じことが言えるのだが、前世と共にして敵を撃退するには結局は自分の力を振るい、それを傷つけなければ

ばならない。

だから、悟飯は積極的にヒーローを目指そうとは思わなかつたし、悟空や美空も決してそれを強制したりはしなかつた。悟飯自身も、身近にあるものを守れる力さえあれば十分だと考えていた。

とは言え、彼はある事件をきっかけにして、父を超える偉大なヒーローを目指すようになるのだが……それは後々の話である。

閑話休題。“個性”を持つ人間が蔓延る、超人社会となつた現在ではあるが、それを持つのはあくまで世界総人口の8割。裏を返せば、それを持たない例外の人間もいるということだ。

”個性”を持たない人間達は無個性と呼ばれており、“個性”を持つ人間達に苛まれさいな、淘汰され、社会の除け者にされるという何とも忌々しい傾向がある。

その典型的な例として、彼ら無個性の人間もまたヒーローに憧れるが、それをすれば「無理だ」と蔑まれるし、蔑みを跳ね除けて努力をしていたとしても馬鹿にされ、嘲笑われるといった、無個性の人間を無意識であろうが故意であろうが見下す現象があるのだ。

人を見下す心理として、他人が人より劣つてゐる点を見つけ出して安心したいというものがあるそしが、なんとも悲しく、虚しいものである。同じ人間同士だというのに、かつての自分達は無個性と同じ立場だったというのに何と酷い話だろうか。彼らの扱いは、言わば障がい者のようなものだ。

因みにだが、母の美空は”保湿”という”個性”を持つものの、悟飯や父の悟空はその2割の人間にあたる。

ならば、何故悟空がN.O. 4ヒーローという地位に辿り着けたのか。彼の死に物狂いの鍛錬の成果と言わればまさにその通りなのだが……彼がこの地位に辿り着けたのにはもう一つ理由があり、彼の家系が関係している。

彼の家系である孫家は、非常に特殊な家系だ。超常黎明期を迎えてもなお、生を授かつた男児達は誰一人”個性”を持たず、無個性であつた。孫家の人にとつて、無個性であることはもはや運命なのである。勿論、悟飯や悟空も例外ではなかつた。

そんな彼らは、超常黎明期以前から代々とある技術を引き継いできている。その技術こそが”氣”。己に秘められた潜在エネルギー（生命エネルギー）をオーラとして顯在化させ、それを自在に練り操る技術だ。

この技術は、前世の記憶を持つ悟飯にとっては大変馴染み深いものであった。己の体内に秘められた、潜在エネルギーでもあり、生命エネルギーでもあり、戦闘力でもある”氣”。本質は大体それと同じようなものであるようだ。ただし、生命エネルギーである故か、今世ではそれを開放することで身体能力を引き上げたり、それの顯在化によつて若さを保てるというようなことが証明されてもいる。

ヒーローを目指す、目指さないに関わらず、”氣”の技術を継承することは、孫家の人間が賜つた役目だ。故に、悟飯もまた悟空から”氣”の扱い方を教わったのだが……体が覚えてているとはよく言つたものだ。

前世から馴染み深い力であつたのもあつて、悟飯はその扱い方を習うようになつた4歳の頃から凄まじい”氣”的コントロールを身につけた。そのあまりのセンスに悟空が驚いたのは言うまでもないし、「こりやどんでもない才能だ」と自分を超えてくれることを確信して、1人の親として喜ばしくもあつた。

この”氣”というのは”個性”ではなく、人間誰しもが持ち合わせる潜在エネルギーを顕在化させて、操るだけの技術である為、無個性だろうが”個性”持ちであろうが扱うことが可能だ。

しかし、何と嘆かわしいことか。これを技術だと知つてゐる者は、一般人において全くと言つていいほどいないし、プロヒーローでも一部の者しかいない。悟空や悟飯自身もそうだが、自分が無個性だと伝えると大抵信じてもらえない傾向にあるのだそうだ。悟空に至つては、”氣”的ことを社会に広める為に、その扱い方や会得方法、原理などについて分析した書籍を出版しているというのにそういう悲しい現状がある。

まさに、木を見て森を見ず。”個性”を持つか持たないかという小さなことにだけ目を向けた結果、社会の全体を見る目がなくなり、見

識が低くなっている証拠だ。井の中の蛙大海を知らず、とも言えるであろうが。

”氣”的おかげもあつてか、本人がやる気になると強いからかは定かではないが、悟飯は無個性ながらも他人に淘汰されるようなことがなかつた。彼は、一風変わつた環境に囮まれながらも幸せな日々を過ごしていた。

今日も今日とて、家族3人揃つて朝食をいただき、自分の通う中学校へと向かうところだ。

「お父さんもお仕事頑張ってください！」

「おう、悟飯も勉強頑張ってこいよ！」

制服に身を包み、玄関に立つた悟飯が声を上げる。大抵、彼が学校へと向かつた後に悟空は自分の経営するヒーロー事務所へと向かう訳だが、行つてきますの挨拶は、悟飯にとつて彼の見送りも兼ねているのだ。

今日も変わらず元気そうな悟飯を見て、悟空は春の穏やかな木漏れ日のような暖かい笑みを浮かべる。もしかすると、彼としても悟飯が無個性だからと除け者にされていない事実に安心しているのかもしれない。

その後、悟空は父親らしい暖かい笑みから一変。誰かに恋心を抱く級友を揶揄う高校生のようにニヤニヤとしながら、悟飯の肩に腕を乗せて耳打ちする。

「悟飯、百ちゃんと何か進捗あつたら報告するんだぞ」

「なつ、ななな、何言つてるんですか!?」

「百ちゃん」とは、悟飯の長年の幼馴染である少女の名前なのだが……予め言つておくと、悟飯とその少女はまだ幼馴染であり、そういつた関係ではない。前世、色恋沙汰に時間を割く暇もなかつた為か、悟飯は頬を微かに赤く染めて父の方を慌てて振り向く。

「進捗も何も、百は大事な幼馴染です！」

「ほ〜、そつかそつか」

顔を赤くしながら否定する悟飯の様子は、まさに恋をしていることを言い当たられた思春期の少年のそれである。本人は自分と同じく

隠し事が得意な性格ではないし、つくべき嘘以外はつかないだろうし、言つていることは事実なのであろうが……。

(多少なりとも意識はしてんだろうなあ)

悟空はそう確信しながら、悟飯の少年らしい一面が見れたことにホツとしていた。

そんな2人の様子をいつから窺っていたのだろうか。美空が今朝道場を訪ねた時のようにして壁の向こうから顔を覗かせ、くすくすと笑いながら助け舟を出してきた。

「悟空さん、程々にしてあげてね。悟飯ったら、昔からそういうのには疎いんだから」

母の発言に、悟飯はその顔を熟れかけた林檎のレベルにまで赤く染めると、ドアノブに手を掛けてから恥ずかしさを堪えるような顔を向けた。

「お父さんもお母さんも2人揃つてやめてください……！じゃあ、行つてきます！」

そして、彼は照れ隠しのようにして挨拶をすると、ドアを開けて中学校へと向かっていくのだつた。

「氣イつけるよーー！」

そんな悟飯の背中を、両親は微笑ましく見守り、手を振りながら暖かく見送つたとか。



悟飯の自宅から徒歩で数分後。彼は、とんでもない豪邸の前に來ていた。

そこいらにある小学校やら中学校の体育館、もしくはそこの校舎そ

のものと同じくらいの規模の建物があり、その周囲はレンガの壁で囲われていて、鉄の扉をあしらつた立派な門もある。真正面には御大層に立派な噴水も配置されている。

その景色は、西洋でよく見られるような豪邸そのものだ。悟飯は毎度ながら、ここに来ると自分が貴族社会の中にタイムスリップしたかのように錯覚する。

水に慣れるとは言うが、こればかりは新たな土地で飲む水とは違つて簡単に慣れないのである。

「！悟飯さん、おはようございます！」

そんな豪邸の景色を見ながら、その壮大さにいつもと変わらず浸つていると、彼の存在に気がついた少女が、人懐っこい猫が心開いて甘える時のようなふんやんとした笑みを浮かべて、声をかけてきた。

少女は、長い黒髪を後頭部でまとめてポニーテールの髪型をしている。肌は血色が良くはあるものの、それを考えたとしても他と比べると白い方であった。——活発に外で遊んだりするよりも、屋内でお淑やかに過ごす方を好むのだろうか——

更に黒い瞳を持つ、吊り目気味なキリリとした切れ長の目が特徴である彼女の顔付きは、非常に端正だ。彼女を見た男性の10人中10人全員が彼女のことを「可愛い」だとか「美人だ」って褒めるだろうし、さながら”立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花”という女性の美しさを花に例えた言葉をたつた1人で体現しているであろう。

吊り目気味であるのと、普段の立ち振る舞いが凛としているからか、多くの人は彼女を強気な大和撫子風の少女だと考えるはずだ。

しかし、なんということだろう。彼女は悟飯に向けて年頃の少女らしい柔らかい笑みを向けたのだ。これぞまさにギャツブ萌え。多くの男達がハートを射抜かれ、恋心を刺激されるに違いない。

「ああ、おはよう。百」

そんな笑顔を向けられた悟飯も、もはや恋人に向けるそれだと断言していいくらいに朗らかな笑みを向けて、手を振つた。

実は、この少女こそが彼の幼馴染なのだ。名前を八百万百と言う。

文武両道、高身長で博識、そして可愛らしい容貌とモデルのように发育の良い体……。そんな少女が幼馴染だと知れば、余程恵まれていな限り、世の中の男達は嫉妬すること間違いなしだろう。

八百万は、いつも通りに悟飯の左腕に自分の腕を嬉しそうに絡まる。そんな彼女に向けて悟飯も微笑み、彼女の頭を撫でてあげた後、足並みを揃えて歩き始めた。こんな様子で、いつも自分達の通つている中学校に向かう彼らなのだが……明らかに幼馴染以上の距離感である。大事なことだから予め言つておくが、彼らは決して恋人同士ではないのだ。

肩を並べて歩きながら、彼女は義手となつた悟飯の左腕を、壊れ物を扱うように優しく撫でては尋ねる。

「悟飯さんは、今朝も修行をされたのですか？」

首を傾げながら尋ねる彼女に、悟飯は肯定を示しながら拳を握つた。

「勿論。毎日の日課だしね。それに……そろそろ本腰入れていかない」と

悟飯の返答に対し、感心して微笑みを向けた八百万は同意しながら答えた。

「ふふ、そうですわね……。近いですものね、雄英高校の入試が」

「ああ」

国立雄英高等学校。国内最大級のヒーロー養成校であり、偉大なヒーローを目指すというのならば必ず通ることになる登竜門だ。

オールマイトやエンデヴア、ベストジーニストに、悟飯の父でもある悟空。数多くの人気ヒーローを輩出した名門校だが……偏差値は79。更に、倍率はそこのヒーロー科のみで毎年毎年300倍を叩き出すという超難関校もある。

悟飯と八百万のを目指す先は、そんな偉大なる場所なのだ。無論、彼らも多大な努力を積んでいる最中だが、通るとは限らない現実もある。

まさに、研鑽を積んで護衛を任された優秀な騎士のみにしか立ち入れない王座の間のようにして、通れる人物には限りがある訳だ。

悟飯達の通う中学校には、雄英から推薦入試の資格が授けられた。その候補は、学校内でとびきり優秀な成績を収めている悟飯と八百万だつたのだが……レディファーストとはよく言われるものであり、悟飯はその道を選んだ。こうして、彼の期待も背負い、八百万は雄英の推薦入試を受けることに決めたのだ。

「悟飯さんのご期待に添えるように、全力を尽くします。必ずや受かつて、悟飯を支えられる立派なプロヒーローになりますわ」

左腕に向けていた目線を悟飯の方に向か、彼女はやる気に満ちた表情で言う。

彼女のやる気を感じ取った悟飯は、微笑みを向ける。

「ありがとうございます。オレも応援してるよ」

「ありがとうございます。お互いに、ですわね」

（オレだつて、一度と百に怖い思いをさせない為に、泣かせない為に……強く、偉大なヒーローになるんだ！）

会話を交わしながら、悟飯は密かに右拳を握りしめて強い意志をその黒い瞳に宿していた。

幼馴染であると共に、自分がヒーローを目指すことになつた原点でもある少女……。悟飯にとつての彼女は、そんな存在なのだ。

悟飯の瞳を見ていた八百万は、彼に対する畏敬の念を抱く、1人のヒーローに純粹に憧れる少女のような笑みを浮かべたが、その後。彼の左腕に再び目を向けて、どこか悲しげな目をしていた。

……そもそも、悟飯がどうやって左腕を失うに至つたのか。それを語るには、彼と八百万の出会いにまで時間を遡る必要がある。

3話 孫悟飯：オリジン（中編）

悟飯と八百万の初めての出会い。それは、彼らが4歳のことだ。

「や、やおよろずもともうします！ よろしくおねがいします！」

「百ちゃん……つていうのかあ。可愛い名前だね。宜しく。オレは、孫。孫悟飯っていうんだ」

家が豪邸である以上、育ちもいい八百万は教養があった。故にお嬢様らしい言葉遣いというのも既に学んでいる身であった。それもあつて、緊張しながらも4歳の子供にしてはしつかりとした言葉遣いで挨拶をした彼女に対し、悟飯は更に大人びた……たどたどしさが一切ない言葉遣いで余裕のある挨拶を返したことを、八百万は昨日のことのように覚えている。

その後、八百万の父や母が彼の対応の紳士っぷりを自分の子供であるように褒めちぎっていたこともあってか、悟飯との出会いはより鮮明に彼女の記憶に残っていた。

勿論、それは八百万に限った話ではない。前世では女性との関わりが決して多くはなく、女性関係に疎い悟飯にとつても、幼い頃から雛人形のような可憐で可愛らしい容貌をしていた彼女との出会いは鮮明に覚えていることだ。

その出会いから、2人の幼馴染生活が始まった。

2人はお互いに家が近くであり、幼稚園から中学校までずっと同じところに通っているのだが……当然ながら、幼馴染同士よく遊んだし、年を重ねてからは共に学習するようになつた。

その最中で、2人は出会うことそれ 자체が運命であつたかのようにあつさりと仲良くなり、親交を深めていく。今や、2人の仲は周囲の人々の誰もが彼らを恋人同士だと勘違いする程だ。——ただし。2人揃つて天然且つ、異性との関係に疎いせいで付き合うまでに至つていないので。加えて言えば、理由はそれだけではない——そんな彼らの様子を見てか、両親達は2人を必ずや結婚させようと思っているようだ……。

そうして仲を深めていく中。悟飯にとつて、とても意外なことが起きた。

それは……八百万が、悟飯や悟空が無個性であることをあつさりと信じたことであつた。悟飯は幼い頃から自衛の術を学んだ上に、前世での経験があつたからか、同じ年の子供達からしたら信じられない強さをしていたし、その頃には既に、氣、を教わつてまともに扱えていた。そして、悟空はプロヒーローとして活躍している実績がある上に、悟飯と同じように、氣、を扱えた。それ故、‘個性’のことばかり頭に置いて、見聞の狭い者達には全くと言つていい程信じてもらえなかつた。

しかし。八百万……否、八百万一家は、その例外であつた。彼女の家では教養のある立派な人間を育てる為か、幼い頃から英才教育を施している。教育の中で、‘個性’でなくとも素晴らしい技術があることを知る為に、‘氣’についての学習も施されているようだつた。無論ながら、悟空が直々に出版した書物も彼女の家も書庫に収められている。

昔から伝わる、氣、の技術を自分達なりに研究し、自らの見識を広げる。そんな彼らの姿勢こそ、まさに温故知新である。

依然として周りから無個性であることを信じてもらえない悟飯からしたら、八百万の存在は自分の理解者のようであつて、いつの間にやら心の安らぎとなつていた。

年を重ねるにつれて、世界に対する人間の理解力は深まるものだ。それもあつて、いつしか八百万は無償の平和の為に奮闘し、人々を救けるヒーローに憧れ、志すようになつた。悟飯は、そんな彼女の夢を応援した。元から自衛の術として体術を学んでいた故、彼女に体術を教えたし、他の面における彼女のヒーローになる為の特訓や学習にも常に付き合つた。

幼馴染の八百万からすれば、悟飯と共にヒーローになりたいという思いが全くなかった訳ではないだろう。しかし、彼女には理解力があつた。

幼い頃から容姿が整っていた八百万は、周囲の男子から、ちよつか

いを出されることが多かつた。雛人形のように可愛らしい彼女を見れば、世の中の少年達が瞬く間に恋に落ちるのは無理もない。

男子にありがちな気になるからこそ素直になれず、ちよつかいを出してしまったという現象なのだろうが……幼い八百万にとつては、教養があるとしても、彼らの気持ちが理解出来なかつた。故に。度々彼女は困惑し、何が何だか分からなまま、目に涙をいっぱいに溜めてしまうということがあつた。——同い年の少年達が、急に馴れ馴れしそうに詰め寄つてくるのだ。幼い少女に恐怖を抱かせるのも仕方のないことだ——

その度に悟飯は彼女のことを見下すが、その際に彼は決して暴力を振るうことはなく、子供を諫める幼稚園の先生さながらの振る舞いで彼らをあしらい続けた。いじめつ子気質な少年達が相手だったとしても、彼らのへなちょこパンチを避け続けた。そして、彼らはスタミナ切れしてバテてしまい、普段は大して強くも無さそうな柔らかい雰囲気の悟飯に負けたからか、ぐずつたように泣き喚きながら逃げていくというのがお馴染みだつた。

閑話休題。八百万は、悟飯がそうしてどんなに嫌な性格をした人間が相手でも暴力を振るわないには、彼が闘うことや誰かを傷つけることが嫌であることが関わつてているのだと彼との幼馴染生活の中で理解していた。

それ故、彼女もまた悟飯の両親のように彼にヒーローを目指すことを無理強いしなかつた。悟飯が自分の側で見守つてくれている。それだけで十分だつた。

相手が誰であれ傷つけることを嫌う悟飯が、何故、時には敵ヴァイランという名の犯罪者が相手であれ、闘いを通して命のやり取りを行い、人々を救ける職業であるヒーローを志したのか。そして、何故、彼が左腕を失つたのか。そのきっかけとなる事件が起きたのは……悟飯が8歳の時だ。



季節は冬。空気が山から湧き出た水のように冷たく感じられ、雪が散らつき始める頃だった。青いはずの空は灰色の雲に覆い尽くされており、どこか不穏な風が冷たく吹き付けていた。

前世で己が命を落とす直前に似たような不穏さがあり、悟飯は、何の理由もなく嫌な予感がしていたことを鮮明に覚えている。

その日も、幼馴染同士である悟飯と八百万はいつも通りに遊んでいた。雪が散らつく中、家の広い庭で、**氣**を扱う練習も兼ねて、2人揃つて掌と掌の間に小さな気弾を作り出し、狂ったように色々と動かしていたであろうか。——因みにだが、悟飯が無個性だと知り、前々から、**氣**についても興味を持つていた八百万は、幼馴染がそれを扱える本人だと知ると、「わたくしにもおしえてくださいまし!」と悟飯に頼み込んだ。その時の年齢は7歳である——

その最中だつた。

「つ!?

(何だ、この、**氣**は!?)

悟飯は、数km先に邪悪な、**氣**を感じ取った。それが明らかに敵のものであることは察しが付いていたが、問題はその大きさだ。そこいらの敵ヴァイランが虫けらのように思えてしまう程のそれだつたのだ。

冬である上、それ程激しく動いた訳でもないのに、玉のような汗が浮かび、額から悟飯の頬を伝つていく。ただし、それは冷や汗だつた。咄嗟にすぐ近くに立つて自分達の遊びを見守つていた父親、悟空の顔色を窺う為に顔を上げると……彼は固唾を呑んだ様子で、悟飯が、**氣**を感じ取つた方向を見つめていた。

よくよく見ると、瞳が微かに揺れているのが分かる。しかし、彼は即座に動搖を押し隠した。これぞ自己韜晦じことうかい。彼は、本心では動搖しているところを見事に取り繕い、覆い隠したのだ。

これも、**氣**の技術の練度がまだまだ悟空らに及ばず、数km先の

”氣”を感じ取るには至っていない八百万に不安を感じさせない為の振る舞いだろう。

悟飯は、小さな氣弾をお手玉のようにして遊んでいる八百万にチラリと視線を向けた後、何食わぬ顔をして悟空に尋ねた。

「お父さん、どうしたんですか？」

彼の声に視線を下ろした悟空は、己の息子も邪悪な、氣を感じ取つた上でそういう風に振る舞つてることに勘づくと、内心で彼を褒めながら口を開いた。

「ちよつと父さんにお客さんが来ていてな。悟飯、その人とは2人きりで話をすることにしてんだ。百ちゃんと母さんを連れて、ちよつとだけ席を外してくれねえか？」

『……少しでも遠くに離れてな』

笑顔で悟飯に頼んだ後、悟空は、事態を察している彼に対象を絞つてテレパシーを送つた。

「……分かりました。行こう、百ちゃん。お父さんにお客さんが来てるんだって」

無言で頷いた悟飯は、八百万に笑顔で語つては彼女の手を握つた。
「は、はい！おじ様、また後で……」

当初こそ、八百万は困惑する様子を見せていたものの、教養のある彼女としては、悟空に迷惑をかけるなど言語道断だと考えたのだろう。すぐに悟空の指示に従つた。

「おう」

悟空は、そんな聞き分けの良い彼女に朗らかな笑みを向けて、荒っぽくも彼女の頭を撫でる。

そして、美空にも自分に客人が来ている為、ここを離れろと伝えるように促す。

数分と経たず、3人はこの家を出て、離れた場所に移動をしていく。その際、美空と悟空の視線がバチリと合つた。

——死なないで。

——ああ、分かつて。絶対^{ぜつて}戻るから待つてろ。

暗黙の了解。長年悟空と過ごした経験からか、美空は全てを察し

て、目線のみでメツセージを送った。悟空も目線を返した後、美空達の背中を守るパラデインさながらの様子で佇み、邪悪な、氣を感じた方向に目を向けた。

家から離れること、たつた数十m。悟飯達は、背後から凄まじい強風が押し寄せたのを感じた。

巻き起こるはずもない異常な強風に、彼らは反射的に振り向いた。振り向いた先に広がっていたのは、自らの自宅だけで災害が起きたのではないのかと思う程の恐ろしい光景だった。

ベージュ色に塗られた外壁に、複雑に入り組んだ灰色の瓦葺きの屋根。モダンな和風デザインを施した2階建ての立派な家は、無惨にも瓦礫と化し、かつて家だったものになっていた。今も、地鳴りのような轟音を立てながら家の2階部分が崩れ去っている。

そして、あろうことか……そこから火が吹き上がっているではないか。その火の大きさ故か、数十m離れているというのに悟飯達の顔がそれによつて朱色に照らし出されていた。

そんな世紀末さながらの光景に、八百万は耐えきれずに悲鳴を上げた。

「いやあああああ!!!!おじ様ああああ!!!!」

「大丈夫、大丈夫よ、百ちやん……！悟空さんは、私の自慢の旦那様だもの……。早々敵に負けたりしないわ！」

このままここにいては、自分達にも危険が及ぶと本能が訴え、悟飯達の足も自然と動く。足を止めることなく走り続ける中、狼狽える八百万を美空が励ます一方で、悟飯は依然冷静であつた。

（そこのらの敵の何十、何百……。いや、下手をしたら何千や何万倍もの

‘‘氣、……！」

自分達の暮らしていた家を無惨な姿にしたであろう男の、氣の大ささをより鮮明に把握しながら、悟飯は走る。

「お父さん……！大丈夫ですよね……!?」

隣を走る2人を不安にさせないよう、悟飯は密かに咳いていた

……。

瓦礫を覆い、燃やし尽くす勢いで立ち昇る炎を突き破り、悟空が姿を現す。幸運なことにも、彼は無傷であった。彼の周囲には、よくよく目を凝らさなければ見えない程の薄い、**氣**の障壁が張られている。„**氣**“の集中に形状変化を組み合わせることによつて障壁——即ち、バリアを形成して、突如押し寄せた風圧や立ち昇つてた炎を防ぎ切つたのだ。

バリアを解除し、„**氣**“を開放して、体から烈火の如き勢いで白いオーラを噴き出させながら悟空は目の前にいる敵ヴァイランを睨みつける。

その男は、„**氣**“が扱える訳でもないというのに、悟空と同じようにして空中に浮いている。見る限り比較的体格は良く、黒いスーツを着ていた。一見、何処かの大企業の社長か何かだろうかと思われるが……彼が口の端を微かに吊り上げながら浮かべている不気味さに満ちた笑顔から、そうではないことは一目瞭然だつた。

彼の見た目は、30代前半くらいであろうか。非常に若々しく、こんなこんと湧き出る水のような、静かな生命力に溢れていた。その一方で、長きに渡る時を生きていなければ発せない程のカリスマ性と威圧感があつた。

「氣味の悪いヤツだな、お前はよ。オレがガキの頃から全く姿が変わっちゃいねえ。個性、奪う、個性……。それがお前の、オール・フォー・ワン、だつたな」

悟空が意味深長げな発言をすると、男は大層嬉しそうに不気味な笑みを深めた。

「ははは……嬉しいね。僕のことを覚えていてくれたのかい、孫悟空。そりや、当然覚えているか。君の祖父と父親を葬つたのは他でもない僕だからね」

憎たらしい程に不気味な笑みを浮かべて、余裕綽々に振る舞う男に対し、悟空は出来る限り、怒りを表に出さないように拳を握り締めながら答える。

「ああ、一時も忘れたこたアねえぜ。オレの家族にも、この周辺の人々

にも手出しはさせねえ」

腰を落とし、右手を握り拳にして腰に添える。更に、左手の小指と薬指を曲げて掌につけ、親指も曲げて掌へと添え……人差し指と中指は第二、第一関節を曲げたまま立てる。そして、左手の位置は、顔の辺りに。格闘ヒーロー、武神、として、お馴染みの構え。男は、それを取つた悟空から凄まじい闘志と威圧感を感じ取る。

武闘家さながらの隙のない構えと臨戦態勢を取る悟空を見た男は、大層楽しそうに不敵な笑みを浮かべた。

「相変わらず、孫家の人は勇ましい人間が多いようだね。素晴らしい！それに、無個性ながら君達一人一人があの男の半分以上は強い。精々楽しませてくれよ。樂しんだ後に、君の血筋を滅ぼすとしよう。僕の宿敵と手を組まれたら、厄介極まりないからね」

「ああ……楽しませてやるさ。そんでもって、誰1人死なせやしねえ」

恐ろしい程の静寂。2人は距離を取つたまま、動かない。

そして、吹き抜けた一陣の冬風をきっかけとし、彼らは同時に距離を詰めた――！



崩れ去つてただの瓦礫と化した、かつての自宅。その上空で紅き炎に照らされながら、スーツ姿の男と私服姿の悟空が激戦を繰り広げていた。

冬空という広大なフィールド上を存分に立ち回りながら、男と悟空は熾烈な乱打戦を繰り広げていた。拳と拳。それらが一切の引けを取ることなく衝突し合っている。その闘いの激しさは、拳がぶつかり合うたびに鳴り響く、自動車同士が衝突事故を起こした時を彷彿とさせるような轟音からも明らかだ。

経験がものを言うというのは本当によく出来たことわざだ。

ヒーローとしてだけではなく、1人の武闘家として数々の戦闘経験を積んできた悟空は、ヒーローの中でも屈指の実力者となり、今やオールマイトに次ぐと言われる程のパワー、スピード、テクニック——それら全てを兼ね備えた高レベルの戦闘を繰り広げることが出来る。それらの経験は、今回の闘いにおいても遺憾無く役立つていた。実力もないアマチュアヒーローや、ヒーローとしての覚悟がない偽物のヒーローなどが黒スーツの男を相手取つていれば、瞬く間に敗北を喫することだろう。

対する黒スーツ姿である、どこぞの魔王にも似た不気味なカリスマ性を持つ男に、こういった乱打戦の経験があるかというと……答えは否だ。

ならば、何故、格闘戦の達人とも言うべき悟空と真正面から乱打戦を繰り広げられるのか？

その秘密は、この男の、個性、にある。この男の、個性、に冠された名は——、オール・フォー・ワン、。直訳すると、「皆は1人のために」という言葉になる。

1人の人間や一つの目標の為に、周りの人間が一丸となつて尽くし、大義を成す……。そういういた良い意味を持つ言葉なのだが、この男の、個性、に関しては全くもつて違う。

悟空の言葉通り、,,個性,,を奪う、個性、。それが、この世界における、オール・フォー・ワン、だ。それだけでなく、自身の奪つた、個性、を他者に与えることも可能だ。,,個性、を奪うにも与えるにも、多くの場合はそれをされる対象の意志は介在しない。端的に言えば、無理矢理に己が干渉し、望むがままにするということだ。

男からすれば、それをする対象は奴隸のようなものなのであろう。彼の振る舞いからは……君達の意志は関係ない。黙つて僕に従え、と言わんばかりの傲慢な王のような横暴な考えが根底にあることが察せるだろう。

閑話休題。そんな傲慢な王の如き巨悪である男が奪つた、個性、の中に、”軌道予測、”という、視界に入った凡ゆるもの軌道を予測

することが出来る、個性、があるのだ。

「軌道予測」によつて悟空の繰り出す拳の軌道を予測し、己もそれを迎え撃つてゐるという訳である。

己の拳で猛獸の牙の如く襲い来る悟空の拳を迎え撃ちながら、男は笑つた。

「ハハハハハ！やはり、孫家人間との闘いは楽しいな。あの男は悪く言つてしまえば脳筋。対して君らは、強さと技術の両方が高レベルだ。君に守られる市民達はきっと幸せなことだろうさ！」

——皮肉だ。純粹に悟空を褒めている訳ではない。この男がどれだけ嫌味つたらしい男なのか。悟空は、それを知つてゐる。

「そりや……どう、もつ！」

感謝という名の皮を被つた怒りを込めて、悟空は正拳突きを繰り出した。正拳突きをその目で見た男は、軌道を予測することで見事にそれを躊躇^{かわ}したが……。

「ぐぶつ！？」

次の瞬間、腹部に別の衝撃が押し寄せる。恐る恐る視線を下ろせば、腹部には悟空の膝蹴りが叩き込まれていた。

そう。悟空の繰り出した正拳突きは、男を引っ掛ける為の罠だつたのだ。

悟空は、この短時間で、男が自身の拳の軌道にやたらと注目していることから、個性、による恩恵によつて、こうして自分と張り合つているのだといふことに勘付いた。そして、男が視界に入つたものの軌道を読む、個性、を持つてゐると予測。そこで、相手の注意を意図していない別のところに向けさせる技術——つまりは、ミスディレクションだ——を用いたのだ。

仕組みは、分かれば至極単純。男の視界を一点に集中させる為にその顔面に向けて正拳突きを放ち、続け様に男の視界——その死角から膝蹴りを叩き込む。たつたそれだけのことだ。

男の肺に残された空氣を絞り出させるように膝を押し込んだ悟空は、膝蹴りを繰り出した方の脚を振り上げて蹴り上げを繰り出す。鍛え上げられた故、悟空の体は強靭。黒スーツの男一人を空中に蹴り上

げるくらいのことは、造作も無い。

サツカーボールの如く空中に蹴り飛ばされた男に狙いを定め、悟空は己の両掌の間に眩く輝く、勇ましい生命力に満ちた蒼い光を充填させる。

空中にて無防備状態である男に向けて放つのは、悟空の十八番——！

「かめはめ……波アアアアア!!!!」

勇ましい叫びと共に解き放たれた蒼い閃光。それは、天を翔ける1匹の青龍が如く無防備状態の男に迫る。誰もが命中するに違いないと思うはずだ。

しかし。

「物質硬化、プラス、形状変化、」

男は、自分の手で触れたものを硬化させる、個性、と、凡ゆる物体の形を思うがままに変化させることが出来る、個性、を組み合わせることで不可視の障壁を作った。大気中の窒素やら二酸化炭素やら酸素やらが硬化することで出来た障壁は、悟空の十八番を見事に防ぎ切る。

ほぼ予想通りの結末に、悟空が警戒態勢のまま、かめはめ波の構えを解いた瞬間だった。男は、指先を黒い枝のようなものに変化させた。それは、人間の身体中を巡る血管のような赤いラインが入り、禍々しかつた。仮に魔界に大樹が存在するとしたら……このような枝を張り巡らせているのかもしれない。

見方を変えれば、禍々しい爪のようにも見える黒い何かが鞭のようなしなやかさで以つて振われる。

「指先が枝みてえに……！」

変化^{へんげ}と言うに相応しい変わりつぶりに驚きながらも、悟空は無駄のない動きで次々と振られる黒い何かを避ける。

「避けるか。素晴らしい」

まだまだ切るべき札は沢山あると言わんばかりに、男は悟空の動きを褒め称えた。彼の言葉を聞きながら、悟空は舌打ちすると大気を蹴つて跳躍した。

宙でバク転しながら距離を取った彼は、すぐさま身を翻し――

「だりやあああっ!!」

拳を振り抜くと同時に見えない衝撃波を放つた。衝撃波は、まさにソニックブームを己の身で再現したものと言つても過言ではない。凄まじい速度で飛行機が低空飛行した時に起きた轟音を彷彿とさせる音を立てながら、男に迫りゆく。

「不可視の衝撃波かい？なら、こちらも似たようなもので対応させてもらおうじやないか。」空気を押し出す、プラス、筋骨発条化、プラス、瞬発力 \times 4プラス、^{りよりよく}筋力増強 \times 3

筋肉と骨の発条化。その上から瞬発力と筋力を増強することで発条の性能を格段に上昇させ、その力に乗せて空気を押し出す。やつたことはシンプルだが、嵐の中で吹き寄せる一陣の風を彷彿とさせる風圧が巻き起こつた。悟空の衝撃波と男の風圧は衝突と同時に相殺され、空気の塊が爆発を起こす。雲を晴らさんばかりの勢いで巻き起こつたそれは、悟空と男の両方が踏ん張りを利かせていなければ吹き飛ばされてしまう程の威力があつた。

やはり、相手が相手だ。真正面からぶつかつてばかりでは勝てない。

「やつぱ、虚を突くしかねえか……！」

目の前の相手に負けない為にも綺麗事は捨て去る。今は、それよりも市民達や家族の安全を守ることの方が大切だ。

悟空は決意をすると、”氣”を完全に消した。抑えるのではなく、完全に消し去つた。分かりやすく言うなら、電気のスイッチをオフにしたり、携帯電話の電話を完全に切つてしまふかのように、”氣”を消したということだ。――音楽のボリュームを徐々に下げてゼロにしたり、蛇口を徐々に捻つて水を止めるというように、”氣”を徐々に抑えて最終的に消した訳ではない――

”氣”を消すというのは、”氣”を扱つた闘いの中で更に先の次元に踏み込む為の大きな一步となる。心を無にすることと己の存在を無にした結果、気配を絶つに加えて、動きの無駄を無くして高速移動が出来るのだ。それも、常人の視界では認識出来ない程の。

誰であれ、少なからず感じ取れる場合もある人間の気配の正体は、活動した際に皮膚の表面に染み出した弱い電気——これを準静電界といふ——が体の周囲に作られることで出来た、薄い膜である。

無心になることで己の存在を無とする。即ち、体の表面に顕在化する生命エネルギーとも言える、”氣”を消す。それによつて、生じた電気を無駄なく体の外に滲み出させずに、無駄を削減して効率よく生命活動を行うという芸当も可能になる。気配を断ち、動きの無駄を減らせるのはそういう仕組みだ。

——さて。”氣”を消した上に、気配を絶つた以上、その対象の動きを追うことは出来るだろうか？ 答えは、第六感が並外れて優れててもいない限り、否……である。

「おや？ 消えたね」

このカリスマ性を持つ黒スーツの巨悪も1人の人間。気配が絶たれば、僅かであろうとそれを感じることは出来ない。そして、幸運なことに第六感に関する”個性”を所持しておらず、高速移動を行つた悟空の動きを目で追うことは叶わなかつた。

もう一度言つておくが、悟空は断じて消えたのではない。高速移動をおこなつたのだ。高速移動によつて男の懷に潜り込んだ悟空は再び”氣”のスイッチをオンにして存在を露わにする。

「ツ?! いつの間に……!?

男の視界からすれば、悟空が突然自分の懷に現れたようなものだ。彼はその目を見開き、”瞬発力”の”個性”で己の瞬発力を引き上げて迎え撃とうとするも、時既に遅し。

「オラアアアアッ!!!」

秒速 $340\text{ m}!$ ——即ち、音速を超えるとされる拳銃の弾。それにも差し迫る速度で放たれた悟空の拳は、彼の猛々しい雄叫びを発砲音として黒いスーツを着た男の右頬を穿つた。

「だりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやつ!!!」

戦闘の勝利と敗北。その命運を分けるのは、ほんの一瞬の隙だ。自らの作る隙を如何に減らせるか。相手に如何に隙を作らせ、そして、如何にそれを突くか。それらが鍵となる。

戦闘のスペシャリストとも言うべき悟空は、当然ながら、それを把握していた。何処かの大企業の社長のような風貌の男には、体勢を立て直す暇すらも与えられない。

骨と骨。そして、皮膚と皮膚が猛スピードでぶつかり合うことで猛烈な打撃音が響き渡る。己の振り抜く拳、その1発1発に闘志を込め、暴風が如き勢いで拳撃の乱打を放つ。

亜音速の速度で放たれる拳は、黒スーツの男にとつて痛恨の一撃となり得る……はずだつた。

拳を叩き込む最中。男に打撃を加えた際の手応えがないことに違和感を抱いて、悟空は訝しげに眉を顰める。確かに彼は男を殴つている。殴つているはずなのに、その感触はゴムの塊を殴りつけているようなものなのだ。

相手に対する警戒を重視して距離を取つた悟空を見ながら、男は不敵に笑みを浮かべた。超スピードで拳が掠つたことによつて流れた口元の鮮血を親指で拭うと、彼は己の力を自慢するかのように楽しそうな様子で一国の大統領さながらの演説を始めた。

「吸收。本当に便利な、個性、だよ。名前通り、体に与えられた凡ゆる力を吸收することが出来る。吸收だから、勿論上限はあるさ。でも、相手がオールマイイト程の馬鹿力でなければ、これは十分な壁となってくれる。そして、吸收した力というのは、倉庫のようにして僕の体内にストックすることも可能だ」

両手を広げ、身振り手振りを交えながら話す彼は、真上からのスポットライトに照らされ、庶民の注目を浴びる大統領そのものであつた。

「個性」の詳細をわざわざ話す辺り、随分とその性能に自信があるらしい。事細かに教えてくれるとは、まさしく棚から牡丹餅。思わずを得をしたものだ、と悟空が思つたその瞬間だった。

突如、男は悟空を見やつて一瞬だけ真顔になる。しかし、それもほんの一瞬のことだった。次の瞬間には、彼は口の端を吊り上げ、微かに目を見開いて体の芯からゾワッと冷たい衝動が押し寄せるかのような不気味な笑みを浮かべていた。

「ところで、孫悟空。僕が何故に、^{なにゆえ} 吸収、のことを説明したと思う？」

まあ……何がしたいのかは、孫家で一番頭のキレる君なら分かっていることだろうけれどね」

「つ、まさか!？」

悟空が勘づいた瞬間だった。男は、[、] 瞬発力[、] によつて凄まじいスピードを引き出して悟空の眼前まで肉迫。彼に触ると同時に新た[、] 個性[、] を発動した。

「放出[×] 内部浸透[!]、僕の体内にストックした君の打撃のダメージをプレゼントだ!!」

「ゴフッ!? つがああああつ!?」

体内にストックした力を名前通りに解き放つ[、] 放出[、] 。更に、触れた対象の体の内部に己の放った攻撃などを浸透させる[、] 内部浸透[、] 。その二つを組み合わせることで発生した、先程の打撃に等しいダメージが、悟空の体の内部に叩き込まれる。

いくら強く、肉体を鍛え上げた人間としても内臓を鍛えることは出来ない。内臓にダメージが与えられれば、誰だつて大きなダメージを受けるし、致命傷になり得る。銃弾並みの威力の乱打で内臓を直接殴りつけられるようなものなのだ。喰らえばたまつたものじゃない。それは、悟空も例外ではなかつた。

しかし、この男は抜け目がなかつた。触れられた瞬間にスーツ姿の男が企んでいることを予測し、内臓に、氣[、] を鎧のように纏わせることで大きくダメージを軽減させたのだつた。

そのおかげで、動けなくなる程のダメージは辛うじて受けていな^{い。}

「ずあつ!!!」

加え、内部に浸透したダメージは、洞窟内にて反響する声のようにして余韻が残り続ける。それでも尚、悟空は目の前にいる男の頬にコークスクリューブローを叩き込んだ。

「ぬうつ!? ダメージを受けていながらも、こちらにカウンターとは……素晴らしい精神力!」

頬を抉り取るかのような勢いで炸裂したコークスクリューブロー

を受けたスーツ姿の男は、大きく体勢を崩して仰け反つた。しかし、達磨のようにしてすぐに体を起こすと、筋骨発条化^{（筋骨が伸びて）}と、骨を槍のような形に変形させ、露出させた状態で自在に扱える、槍骨^{（槍の骨）}を掛け合わせて、螺旋を描いた槍のような骨が露わになつた禍々しい腕を作り出した。

そして、彼は初めて手にしたおもちゃの性能を試す無邪気な子供のような笑みを浮かべながら、捻りを加えて、魔界に住む魔物のそれと言つても過言ではない禍々しい腕^{（かわ）}を振るう。

悟空は、振るわれた腕を咄嗟に躲すも……無傷では済まなかつた。槍のように鋭い骨が悟空の右腕に掠り、その肉を僅かに抉り取つてしまつた。

悟空の顔が苦痛に歪み、彼の額から水に溶かされた絵の具のように滲み出た脂汗が、彼の頬をゆっくりと伝つた。

「ははは！これはいいな……まさか、君の苦痛に歪んだ顔が見られるとは思わなかつた！」

人を殺すことを楽しむ殺人鬼にも喩えられる、狂喜に満ちた笑みを浮かべながら、黒スーツ姿の男が猛然と迫り来る。

「巨悪がお似合いの顔だな」

男の方も十分タチが悪いが、悟空もある意味タチが悪かつた。

彼は、窮地に立つ程にワクワクが増す男。ピンチを楽しめる、戦闘狂気質のある男なのだ。

頬を伝つた脂汗を手の甲で拭いながら、彼は笑つた。軽口を叩きながら、男は迫り来る男を堂々と待ち受ける。

（一度見た攻撃がオレに二度も通用すると思うなよ）

極上物の刀のように鋭い瞳で男を睨みつけると、悟空は籠手を取り付けるイメージで腕に、氣^{（エア）}を纏わせる。

刹那。瞬きをする間に、バキヤアツ！という、何かを打ち碎いたかのような音が耳に入る。

音のした方に視線を向けて見ると、驚きの光景が広がつていた。まるで、木の枝がへし折られたかの如く、槍骨^{（槍の骨）}がへし折られていたのだ。

瞬きする一瞬でこのような芸当が出来る男など、たった1人しかいない。言うまでもなく悟空だ。彼は、槍骨を、氣を纏つた状態で繰り出した手刀によつて、瞬時にへし折つたのだ。

流石にこれ程の反応速度を引き出せるとは思つていなかつたのだろうか。してやつたりと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべた悟空に対し、彼は愕然としながら己の腕を見つめていた。

男から距離を取ると、悟空の両掌から光が発せられた。その数秒後、機関銃と例えるに相応しい速度で連射された気弾が迫り来る。ただし、その幅と密度はまさに壁だ。黒スーツ姿の男の視界、その全てを覆い尽くす程の幅と0・1 mmの隙間をも許さない密度の気弾の壁。それが、彼に向けて津波の如く押し寄せる。

気弾が炸裂する度に爆煙が男の体を覆い隠す。休む間もなく放たれる気弾によつて、煙は天高く立ち昇つた。そして、徹底的に攻めると言わんばかりに、かめはめ波が彼の両掌から放たれ、煙の中に居るであろう男は蒼い閃光に呑み込まれた。

悟空は、爆煙に覆われた先を油断なく見つめ続ける。淀んだ煙が晴れた先にあつたのは……。

「防がれたか……」

「素晴らしい密度と範囲の攻撃だつたね。だけど、僕には届かない」無傷のままで悠々と空中に佇む、黒スーツの男の姿であつた。恐らくは、例の、物質硬化、と、形状変化、を組み合わせることで不可視のバリアを形成し、悟空のかめはめ波を防いだのだろう。

攻撃が当たらなかつたことを哀れんでいるのか、男は親に捨てられた孤児を見るかのような笑みを浮かべては風圧を放つ。

「ゴフッ！」

放たれた風圧を諸に喰らつた悟空の肉体は、新幹線に衝突されたかのようにして軽々と吹き飛んでしまう。その勢いのままに何軒かの住宅を巻き込み、薙ぎ倒したところで漸く勢いが弱まつた。

数m先に淀んだ土煙。それを一瞥するや、男は上空に両手を掲げて”オーラ”、という、個性、を使用する。そして、その両掌の間に、際限無く広がる漆黒と言うに相応しい不吉な色をした、ソフトボール程

のサイズの念力弾を作り出した。

男は、**“拡声**”——その名の通り、己の声を拡散させる。たつたそれだけの、**“個性**”だ——を使用して、己の声を辺り一帯に轟かせた。**「ヒーロー**は守るものが多くて大変だね！可哀想に！今から僕は、この念力弾を街に向けて放つとしよう！！これを避けるだとか、応援を要請するだとかは考えない方がいい！これを避けねばどうなるか……君も予想はついているはずだ！この街がまるまる一つ消し飛ぶぞ！応援に関しては、要請することを考えないというより、期待しないほうがいいと言った方が正しいかな？何故つて？単純さ。僕が細工を施しているからだ！」

「君の家だつた場所を中心に、半径1km！僕は、この範囲に、蜃気楼の、**“個性**”を使つた！範囲外からは、何の変哲もない君の家とその周囲の景色が見えることだろうね。他のヒーローが君の孤独な戦いに気付くことはない！」

やつと残りのピースがはまつた、と悟空は思つた。
実を言うと、この男と孫家は浅からぬ因縁がある。悟空自身、この男と邂逅するのはこれで三度目だ。

三度の邂逅の中で、彼が気持ち悪いくらいに不気味且つ慎重な性格をしているのは知つてゐる。その性格から鑑みるなら、このスース姿の男がここまで派手に暴れることはあり得ないのだ。

そんな男が、何故これ程まで派手に暴れられるのかと疑問に思つていたが……その理由は、単に自分の戦闘しているところを見られないからであつた。彼からすれば、何としてもここで自分のことを殺したいのだろう、と予想がついた。

並べた言葉からすれば同情のようであるが……その実、皮肉に塗れた発言をした男は、上空に掲げた両手を広げる。それと同時に、ソフトボール程だつたはずの念力弾が、何十倍ものサイズに膨れ上がつた。敢えて例えるとするなら、バランスボールを五回り程大きくしたものだろうか。

「避けられない、応援も期待出来ない！ならば……君の取れる選択肢は一つ！受け止める他ないよ、孫悟空っ！！！」

スースツ姿の男は勝利を確信したようにほくそ笑み、腕を振りかぶると、巨大な漆黒の念力弾を悟空に向けて放り投げた。

砲弾さながらの様子で迫り来る漆黒の念力弾を目にした悟空は、弾かれたよう立ち上がる。力を振り絞って体の一点に集中させた、エを増幅させ、爆発させることで全身のレベルにまで開放する。

白いオーラを業火の如く噴き出させながら、悟空は迫り来る念力弾をキッと睨みつけた。

そんな彼に駆け寄り、声をかける者がいる。

「そ、孫さん!? そんなボロボロになつてどうしたんだい!?」

髪を短く整えた爽やかな青年が、幾度となく喰らつた攻撃によつて擦り傷がつくり共に血を流し、服をボロボロにした悟空を見て悲痛そうな声を上げた。

年齢は、20代前半だと思われる。恐らくはこの家の家主なのであろう。

「何があつたの!? 淫い轟音がしたから慌てて来たんだけれど……」

青年に続き、肩までの長さをした艶やかな黒髪をした女性も忙しない様子で駆け寄ってきた。彼女も20代前半だと思われるが、顔立ちは美しいながらも何処か幼さが残っている。2人は夫婦、若しくは恋人のどちらかであるに違いない。

「ツ、オレのことはいいから早く逃げる! シャレにならねえ強さの敵ヴァイランが……！」

声を掛けられるや否や、悟空は鋭い目つきのままで切羽詰まつた声を上げる。彼が言い切るよりも前に、周囲が禍々しい光によつて暗くなつた。

「な、なんだ!?あの球体!」

急に暗がりが出来たせいか、咄嗟に周囲を見渡した青年は迫り来る念力弾の存在に気がついた。女性も彼の指差す方向を釣られるように見ると、幽霊を見たかのように恐怖で顔を痙攣ひきつらせた。

「あれはオレが何とかする! 早く行け!」

悟空は、2人を庇うように立ちながら、一般人である彼らを逃がすことを優先する。

青年は何か言いたげに口を開きかけるも、すぐに言いたいことを呑み込んだ。

——目の前にいる男は、N.O. 4ヒーローである武神なのだ。いつだつて負けない為に戦い抜き、人々を救けてきた。彼の功績を知っているのだから、彼にここを任せない道理はない。

それに。武神だつて、本当の神の如く無敵ではないのだ。それを考えれば、自分達が取るべき行動は決まつている。

「僕達がいたら、孫さんの邪魔になつてしまふ！僕らも僕らに出来ることをやろう！ヒーローを救けるんだ！この辺の人々を避難させてくる！」

「わ、私は近くのヒーローに知らせてくるわ！孫さん、ここはお願ひします！」

何もかもをヒーロー人に任せるのでない。自分達も、普段から救けてもらつている分、出来ることでヒーローを救ける。それこそが今取るべき行動。

それぞれのやるべきことに向けて動き出した2人を視線だけで見送ると、悟空は孫家に代々伝わる秘技を発動した。

「4倍……界王拳ッ！！」

開放させた、氣^{!!}をコントロールし、限界を超えて増幅させる。それによつて顕在化した生命エネルギーをも増幅させ、パワー、スピード、防御力を何倍にも引き上げる。それが、この界王拳なのだ。

先程よりも激しく噴き上がる紅いオーラを纏いながら、悟空はかめはめ波の構えをとる。

「この街は、テメエの好きにはさせねえ……！かあああ……めえええ……はあああ……めえええ……！！」

両掌の間に、平生放つそれよりも遥かに力強さを増した命の輝きを放つ、蒼い閃光が集中する。

必ず念力弾を押し返す、という覚悟が瞳に宿る。鋭い眼光が放たれんばかりの瞳で念力弾を見やつた。

そして――

「波アアアアアアツ!!!!

修羅の如き雄叫びと共に、激流の如く蒼い閃光が解き放たれた！

蒼い閃光と、漆黒の念力弾とが真正面からぶつかり合う。守る意志と滅ぼす意志との張り合い。

スーツ姿の男は必死の形相で抗う悟空を見て、大層楽しそうに笑っている。その様は、自分のいじめに必死で反抗するいじめられっ子を嘲笑するかのようだ。

「ハハハハハ、素晴らしい！君はまさしく真のヒーローだ！凄烈な悪意や、格上の脅威にも決して背中を向けないとは！」

「ぐうつ……！」

力は拮抗……否。悟空の方が押され気味だつた。歯を食いしばり、死に物狂いで念力弾を迎え撃つ彼に対し、黒スーツの男は余裕綽々に力を押し付け、悟空の抵抗を嘲笑つている。

男は、自分の勝利がほぼ確実なものになつたとほくそ笑んだ。目の前にある街が粉々に消し飛び、彼方此方から火が立ち昇る、戦乱によつて滅ぼされたような光景を想像しながら傲然と語る。

「そおら、どうしたのかな？このままでは押し負けてしまうぞ。街が滅びてしまうぞ！君の責任で！」

しかし、男は甘く見ていた。人間の……ヒーローの底力を。

悟空がヒーローになる為に研鑽を積んだ学び舎は、かの雄英高校だ。

そこの校訓は……Plus Ultra。単純に訳せば、「更に向こうへ」という言葉になる。

雄英高校の校訓通り、ヒーローとは今ある限界を更に一步踏み越えていくもの。常に想像の一歩先を行くことで、幾度となくピンチをぶち破ってきたのだ。それは、悟空とて例外ではない。

「ナメやがつて……！」

「…………界王拳、10倍だあああッ！」

「ツ？」

天を切り裂くが如く轟いた、悟空の猛々しい咆哮。

瞬間、悟空を覆う真紅のオーラは更に勢いを増して、天高く噴き上がる。そして、放たれていた蒼い閃光は更に力強い輝きを放ち、先程

の数倍の威力を引き出した。

限界を超えて放ったかめはめ波が、男の放つた念力弾を押し返す。そして、それを宇宙の彼方に吹き飛ばしてしまった。男は、押し返された念力弾を辛うじて避けてはいたが念力弾が飛ばされた先を呆然として見つめていた。

しかし、それも一瞬のこと。再び悟空の方を見ると、やはり自分の勝利は揺るがない……それを不気味な笑顔で訴えた。

「はあっ……はあっ……」

一方、悟空は肩で息をしており、著しく消耗した様子だった。

自身の,, 気,, を精密にコントロールし、顯在化する生命エネルギーを増やすことは、それだけ精神的にも肉体的にも消耗する。

そもそもの話、,, 気,, を開放した状態というのは、己の戦闘力や生命エネルギーを最大まで開放した状態だ。界王拳は、最大まで開放した状態から半ば無理矢理にリミッターを外す、言わば、超開放技術なのである。

体力の限界に達している状態の中、全力で走ればすぐに息が上がる。足が疲労の限界で震える中で走ろうとすれば、怪我をする。このように、己の限界を超えて何かを為す、若しくは為そうとすることはリスクとの隣り合わせだ。

それを考えれば、界王拳を使用した悟空がここまで消耗するのも当然のことであった。

（駄目だ……。氣イ抜いたら、もう二度と立てねえ……！）

自分の体の状況を把握しながら、悟空は氣力で立ち続ける。実の所、彼は立っているのですら限界だ。指一本も動かせず、氣を抜けば生まれたての子鹿のように足が震えて、膝から崩れ落ちてしまう。そんな状況だ。今頼れるのは、これまでに培ってきた鋼如く不動である、不屈の精神のみだつた。

男は、満身創痍にも等しい状態の悟空の前に降り立ち、拍手を送りながら彼に一步ずつ歩み寄る。

「立つている余裕があるとは驚いたよ。孫家人間というのは、強いだけじゃなくタフネスだね」

体が動かない……。たつたそれだけのことでの悟空の闘志は尽きることはない。依然として闘志を宿した日で男を鋭く睨みつけるが——

「ゴフッ!?

醜くも抗わんとする悟空を嘲笑うように、男は悟空の目の前に移動すると彼の腹部にボディーブローを叩き込んだ。

幾度となく肺の空気を吐き出させたことはある。だが、今度吐き出させられたのは……血だつた。内臓を傷つけられた故だろうか。体の底から込み上げる衝動のように激しく血が逆流する。口の中を鉄の味が埋め尽くす中で、悟空は、内部浸透、の、個性、を使用した攻撃を叩き込まれたのだと悟った。

「ははは、やはり流石の君でも内臓までは普通の人間と同じか。それなら……これはどうかなつ!?」

「ぐはあつ!?

続け様に、男は研究者のようにして“個性”の組み合わせを探ることを楽しみながら、悟空の顎にアッパー・カットを叩き込む。

組み合わせたのは、“筋骨発条化”と“内部浸透”。伸縮することで力を溜めたアッパー・カットは、バネそのものの性質を考えれば、脅威が十分に分かり得る。更に、体の内部に攻撃の威力を浸透させる“個性”まで組み合わせた。凶悪な攻撃であること間違ひ無しだ。

その攻撃により、体を空中に打ち上げられながら、悟空の視界がらりと揺らぐ。顎の先端は人体における急所。そこを強打されたことで、脳震盪を起こしてしまつたのだ。

視界がチカチカとブラツクアウトする中、彼の体は跳ねながら地面に落下した。

(限界……か……つ)

先程のアッパー・カットで、完全に集中力が途切れた。悟空の体は、もはや指一本すら動かなかつた。

「……おや? 先程の念力弾で、蜃気楼まで吹き飛ばしてしまつたようだね。はは、僕としたことが……君を殺すことに夢中になり過ぎてしまつたようだ。あの男に見つかる訳にはいかない。君を殺したいと

ころだが、見逃すとしよう。さらばだ、孫悟空」

薄れる意識の中で、男のそんな言葉を耳にする。

男は、地面上に仰向けに倒れた悟空を残して空中に浮き上がり、どこかへと去つていった。

（済まねえ……悟飯、美空……。そつちには、行けそうに、ねえ……な
…………）

崩れ落ちた家々。依然吹き上がる炎。そんな光景の中に残されたのは、己の未熟さに歯を食い縛り、意識を閉ざした悟空だけだった。

……悟空が倒れた一方。悟飯達にも、刻々と危機が迫りつつあつた
…………！

4話 孫悟飯：オリジン（後編）

「お父さん!!」

激戦地から数十m離れた地点で、悟飯は悲痛に満ちた声を上げる。今しがた彼は悟空が気を失ったまま、地面に落下したところを目撃した。悟空が死んでいないことは確かだ。しかし、彼と対峙していた男が空に浮かび、飛び去つていくのを目撃したことでもまた事実。

辺りに流れれる静寂。先程の事実とそれが示すのは——悟空の敗北であった。

幼いながらもそれを察しているのだろうか。八百万も声にならない声を出しながら、その目いっぱいに涙を溜めて声にならない声を出していた。

「……悟飯。悟空さんは……？」

そんな様子の八百万の頭を慰めるように撫でる美空は、固唾を呑みながら悟飯に尋ねる。

「大丈夫です……。,, 気, は感じられますから。お父さんはちゃんと生きてます」

八百万と違つて依然冷静さを保つ悟飯は、的確に悟空の,, 気, を感じ取れた。彼を通じて自分の夫の無事を知つた美空は、ホツとした表情をして息を吐く。

「どちらにせよ、あのスーツ姿の男の人がお父さんを負かしたのは事実です。それに、お父さんにも手当てが要る……。お母さん。オレが行きますから、百ちやんをお願いします！」

「ツ!?悟飯!？一人じゃ危ないわよ！」

闘いを通して受けた悟空の傷が深いのは、,, 気, の大きさで分かる。なにせ、その大きさが闘いが始まつた時よりも小さくなつているのだ。前世の父親とは違う。いくら普通の人間から逸脱した域に居るとしても、彼が人間であることに変わりはない。

,, 気, を分け与えれば、ある程度の傷を治し、回復させることも出来る。そういつた意味と、母を危険な目に遭わせる訳にもいかないという意味も含めて悟飯は己が率先して父の様子を見に行くことを決

め、舞空術で飛んでいつてしまつた。

危険なことは己の身を顧みず引受けの姿は、幼い子供でありながらも既に悟空にそつくりだと美空は思う。ヒーローを望んでいくとも、根は同じように出来ているようだ。親が親なら子も子とはこのことだろうか。

（どちらにせよ、あのままだと百ちゃんまで心配させちゃう。私がしつかりしなくちゃ。私は、あの子の母親なんだもの）

そう意気込みながら美空は、生涯で初めてヒーローの敗北を目にして故の恐怖と不安からか泣き続ける八百万を撫で続ける。慈悲深い笑みと共に彼女の不安を拭い去ろうとするその姿は、まさしく慈母のそれだ。

その時、彼女達の元に新たなる脅威が現れる。

「ここにちは。いきなりで不躾なのですが……人質となつていただきますよ」

「つ!?

目の前に現れたのは、人語を喋る黒い円形の何か。何処ぞの未確認生物かなどと思う余裕などなかつた。

突如その中から現れた、細身ながら筋骨隆々に鍛え抜かれた藍色の腕。それによつて美空は頭を強く殴りつけられてしまつたのだ。

「きやつ!?

一人の母親、若しくは子供を守るべき大人としての意地か。彼女は、脳震盪を起こして倒れ込みながらも、八百万を抱えたまま手を離さなかつた。

八百万を庇うようにして地面に倒れた美空。彼女に縋り付くように抱きついていた故か、八百万は周りの状況を把握出来ず、倒れた彼女に困惑する。なんとか芋虫のようにして身を捩り、脱力した美空の両腕から抜け出でみると……彼女は、頭から血を流して倒れていた。

「!?お、おば様!?どうなされたのですか!?

八百万は、必死の形相で美空の体を揺らして彼女を振り起こそうとする。しかし、彼女は微かに呻き声をあげるのみだった。

「ご心配なく。気絶していただいただけです」

「な、何者ですか!?」

突如降りかかってきた、自分の家に代々仕える執事を彷彿とさせるような紳士的な言葉遣いと声色に、八百万は反射的に顔を上げた。
「そう警戒しないでください。殺しはしません。……ただ人質になつていただだけです」

紳士的ながらも邪悪に満ちた声を発する黒い何かは、己の隣に立つ、藍色の格闘家並みに鍛え上げられた瘦躯を持つており、脳が剥き出しの化け物に八百万を捕らえるように命じた。

「ひつ」

目の前にいる相手の邪悪さとヤバさを本能的に感じ取った八百万は、小さな悲鳴を上げて後退りするも、彼女の小柄で華奢な肉体は化け物の鍛え上げられた腕に呆気なく捕らえられる。そもそも、子供の足の速さが大人と同じくらいの体格を持つ化け物の足に敵う訳がなかつたのだ。

化け物が八百万を腕に抱え、美空を担ぐ様子を見て、黒い何かは満足そうに声を発する。

「良くやりました。では、私達も命じられたことをこなしましようか」「いやつ……離してくださいまし……！」

八百万は、かぶりを振りながら彼女なりに必死の抵抗をした。しかし、8歳の子供に出来る抵抗などたかが知れているというのだ。ボコボコと拳骨をするようにして化け物の腕を叩いているものの、黒い何かには子供の戯れ程度にしか過ぎないし、化け物にとつては痛くも痒くもない。

単純な力でも敵わない。個性、も未だに未熟。抗う術はない。まさしく、万策尽きた状況だ。

そして、彼女の抵抗虚しく、化け物によつて捕らえられた八百万と美空は化け物ごと黒い何かに呑み込まれてしまつたのだつた……。

一方。悟飯は、氣、及び気配を消し去つての移動を行うために、悟

空が地面に落下したであらう地点からたつた数m離れた地点に到達したタイミングで舞空術の使用を中断し、地面に降り立つた。そうした理由は無論、己の足で移動する為である。

実の所、悟空を空中に打ち上げたのであらう例の黒スーツの男の、‘氣’は未だに近くに存在しているのだ。あの男は、‘氣’が扱えるという訳ではないと悟飯は考えている。しかし、あの男が気配を察知するような、‘個性’を持つていたとすれば……舞空術を使用している際に気配を察知されるのは明らかだ。

そもそも、舞空術は、‘氣’を放出することで空を飛ぶ技術である。高速飛行を行う際には、オーラの放出も伴う。簡単に言えば、飛行速度を引き上げようと思うとそれだけ大量の‘氣’が必要だし、大量の‘氣’を放出することになる。更に言い換えてしまえば、それだけ顕在化する生命エネルギーが増加し、気配が濃くなる。

舞空術を使用している時は、大質量の水が轟音を立てながら滝壺に向かって突き進んでいるも同然。自分はここにいるぞと大胆にアピールしている状態でもあるのだ。

気配を察知されるのが明らかだと言ったのは、それが理由である。そこまで考えた上で彼は地上を移動することを選んだのだ。

備えあれば憂い無し。いついかなる時も対策をしておけば、いざという時の心配をする必要もない。全くもつてその通りな事実をことわざとして残した先人達には頭が上がらない。

「！見つけた……お父さん！」

今しがた父の姿を発見した悟飯は、彼の元に駆け寄った。

（吐血……！外傷は思つた程じやないかもしけないけど、体の内部の傷が酷い……！）

事実、悟空の外傷は体中の擦り傷や僅かに抉られた右肩のみに留まっていた。もし、この外傷のみならば、‘氣’が多少なりとも小さくなることはないだろう。‘氣’が小さくなるのは、生命力が弱まっている証拠。そこから鑑みても、彼が重傷を負っているのは体の内部だと判断するのは容易であった。

悟飯は、即座に悟空に自分の‘氣’を分け与えることで彼の傷を回

復していく。

その最中。

「家族を献身的に治療なさっているところ、失礼します」

背後から執事を彷彿とさせる紳士的な声が聞こえた。ただし、彼らとは違つてその声は不気味さに溢れている。体の底から、浴槽に溜められる水のようにして徐々に不快感が湧き上がってきた。

父親を庇うようにして立ちながら悟飯が背後を振り向くと……そこには、バーテンダー服を着た、黒い靄がいた。人型をしたそれはまさに靄人間。鋭く吊り上がつた黄色い目は、凶悪さに満ちた獣や魔物のそれを思わせる。

そして、その傍らには格闘家のように鍛え抜かれた瘦躯を露わにした、藍色の肌の何かがいる。靄人間よりも明確な人の形をしているもの、頭部は脳味噌が剥き出しだ。瞼もなく、常にぎょろりとした瞳には光が何一つ宿っていない。死んだ魚の目と言つても過言ではなさそうである。

意志のない人形のように脱力しているその化け物は――

「ツ!? 百ちゃん!? お母さん!?

「ご、悟飯さん……！ 救けて……！」

美空を俵担ぎのようにして抱え、その小脇には八百万を抱えていた。

「お前……！ 何者だ!？」

悟飯は、拳を握り締めながら靄人間を睨みつける。悟飯に尋ねられた靄男はニヤリと笑うように目を細めながら名乗つた。

「これは申し遅れました。私、とあるお方にお仕えさせていただいております……黒霧と申します。以後お見知りおきを。」氣の技術を扱う孫家。貴方の一家は、あのお方にとつて邪魔になりかねません。それ故、私も孫家の血筋を始末しておくよう命じられたのですよ。……ふむ、確かに面影がある。孫悟空の息子、孫悟飯は貴方で間違ひありませんね？」

自己紹介の中に入り混じる確かな殺意。たつた今、相手は自分を殺すことを宣言してきたのだと悟飯は悟る。

「……ああ、そうだ。けど、オレがターゲットなら、二人に手出しする必要性はないはず。何が目的だ？」

靄人間こと黒霧を睨みつける悟飯の黒い瞳が、矢の先の如く鋭くなる。

対する黒霧は、悪びれない様子で答えた。

「成る程、その件でしたか。彼女らには人質となつていただいたのですよ。孫悟飯、貴方に確實に相手をしてもらう為に。勿論逃げる選択肢など与えません。もしも貴方が逃げるのならば……このお二人の命はないでしょう」

こう言うのも、黒霧に勝利の算段があるからこそだろう。悟飯にとつて、美空と八百万が大切な人物であることを察した上での脅し。このような手口を用いるとは、流石は敵ヴァイランといったところか。

黒霧の言葉に対し、八百万が小さく悲鳴を上げながら恐怖で顔を引き攣らせる。その行為が、悟飯の闘争心と怒りに火をつけた。

悟飯が子供であることには間違いない。しかし、黒霧には二つの計算違いがある。

一つ、彼には前世から積んできた膨大な戦闘経験があること。
そして、もう一つ。

——彼が激情を抱いた時の爆発力だ。

「きやつ!？」

突如、八百万の悲鳴と共に、岩を殴りつけ粉碎したかのような衝撃音が黒霧の元に聞こえてくる。

それらの音に振り向くと。藍色の肌を持つ、脳が剥き出しの化け物が砂煙を巻き上げながらスリップした車のように後退していく姿が目に入る。ついでによく見てみれば、それが小脇に抱えていた八百万

の姿もない。

「ツ!?あ、あの少女は何処に!?」

黒霧は忙しく辺りを見回す。すると、先程悟飯がいたであろう位置に彼女が口を半開きにしたまま、涙で濡れた顔でポカンとしているのが目に入る。そして、今度は悟飯の姿を見失った。

「なつ……いつの間に!?孫悟飯の姿もない……!?

これぞ、咄咄怪事。^{とつとつかいじ}そもそも、八百万が化け物の小脇から逃れられることすら予想もしていなかつた。これの元となつた言葉を言った晋の男は、親友である者の讒言^{ざんげん}で貶められたことを悔しがつたそだが……。黒霧は、ただただ焦つていた。

もう一つの可能性をすっかり頭から捨て去り、八百万にこれだけの力量があつたのかと疑う。そうなれば人質にする相手を間違えたかもしれない。

そんなことを考えていた時だつた。

更にもう一発、先程と同じ——否。先程よりも強烈な、鉄を殴り碎いたかのような衝撃音が聞こえてきた。

「こ、今度は何が……ツ!?

訳も分からぬまま音の聞こえた方を振り向いて、彼は言葉を失つた。

何故ならば……化け物が一人でに空中に打ち上げられていたからだ。無論のこと、担いでいた美空の姿はそこにはない。もう何もかもが理解出来ない。黒霧は衝撃音の正体すらも発せずにいた。

「ええい……！何が起こつて いるというのです……!?

振動を起こして いる音叉を驚掴みにして振動を止めるかのようにして、無理矢理にでも微かな苛立ちを鎮めながら煩わしい様子で黒霧は言う。

そして周囲を見渡してみれば、美空を横抱きにして抱えたまま先程自分がいた位置に戻つていた悟飯の姿が目に入った。

化け物が空中でくるくると車輪の如く回転しながら受け身をとつて、地面に着地した音を耳にしながら、黒霧は悟る。

(この一瞬で、二人を救出したというのですか……!?)我々が視認出

来ない速度で動くとは……！）

彼の察した通りだ。悟飯は、‘‘氣’’を消したことによる高速移動で化け物の元に肉迫。同時に一度目は突き、二度目は蹴り上げを叩き込んで化け物を後退させ、二人を救出したのだ。

「百ちゃん。お父さんとお母さんを頼むよ」

「は、はい」

一見平然としているように見えるが、悟飯はその内に怒りを抱えている。二人を救出した際の速度は、激情時の凄まじい爆発力によつて何倍にも増加していた。

怒りを抱えた時に、凄まじい爆発力を発揮するのは前世から変わらない。事実、その爆発力によつて膨大な戦闘力を発揮し、幼い頃から幾度も前世の父親達の危機を救つたこともあつた。その爆発力は、今世の彼にもしっかりと受け継がれている。

八百万に悟空と美空のことを託した彼は、相手を迎撃つ為に付ける隙が一切ない構えを取る。

臨戦態勢。一糸の精神の乱れもなく黒霧と化け物を睨みつけるその姿は、子供のそれぢやない。黒霧は自分達は、今までに百戦錬磨且つ不敗の戦士と真正面からぶつかり合おうとしているかのような錯覚を覚えた。

「この年齢でここまで迫力……。成る程、流石は孫家。相手にとつて不足はないでしょう。ただし、貴方の相手をするのは私ではあります。隣にいる……改人、脳無です」

そう言いながら脳無と呼ばれた化け物の背後に移動した黒霧は、不敵な笑みを浮かべるようにして黄色い目を細める。その目に宿るのは、獲物を狙い定めた獅子のようにギラついた殺意だ。

「脳無は、私が仕える方とその協力者の方が制作なさつた試作品。『テストがてら暴れさせてくれ』とのご指示をいただきましたのでね。その性能、貴方で試させていただきます」

悟飯は黒霧の殺意にも怯まない。依然として構えを解くことなく‘‘氣’’を体内の一点に集中させ、戦闘開始に備える。

ただ不敵に笑みを浮かべる黒霧に、美空に、‘‘氣’’を分け与えて応急

処置を施しながらも、息を呑んで悟飯の勝利を願う八百万。脳無は人形のようにぼーっとしており、悟飯は既に戦闘する際のスイッチをオンへと切り替えていた。故に、誰一人喋らない。

辺りに流れる静寂。吹き抜ける冷たい冬風。降り注ぎ始めた粉雪。冬らしい景色が広がる中――

「脳無！目の前に立ちはだかる少年を……！孫悟飯を殺すのです!!!」

静寂を引き裂くように、黒霧が自衛隊の長官のような腹の底から絞り出した声で命じた。

刹那。悟飯は集中させた、気を爆発させることで、全身レベルの開放へと昇華させる。体から烈火の如く白いオーラを噴き出させながら地面を蹴つた。

同時に、脳無も先程までの人のようにもぬけの殻であつた状態から一変。明確な殺意を持った獣のようにして地面を蹴つた。

迫り合つた一人と一体は、己の間合いに相手が到達した瞬間に拳を振り抜く。

結果は分かりきつていた。衝突した二つの拳は、拳と拳の間にあつた空気を押し潰し、爆ぜさせる。同時に間近で巨大な風船を破裂させたかのような音が響き渡り、大気が震えて風圧が巻き起こる。

「きやあっ！」

「ぬおおおつ！」

その風圧の勢いのなんと凄まじいことか。小柄な八百万は勢いに耐え切れずに尻餅をつき、体が靄そのものである黒霧は激しい風に曝された炎のようにして靡いた。

互いに拳を押し付け、単純な力と力をぶつけ合う膠着状態もすぐに終わりを告げる。

先に動いたのは悟飯であつた。すぐさま膠着状態から抜けると脳無の元へと大きく一步踏み込み、その土手つ腹にボディーブローを叩き込む。

「だりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやッ！！！」

力強い一撃に一瞬だけながら怯んだ脳無。そのタイミングをチャансとして、悟飯は次々と拳を振り抜いて無数の乱打を繰り出した。

「す、凄い……。まるでおじ様のようですわ……！」

気合いの一聲と共に高速の乱打を繰り出す悟飯の姿は、見ている者に彼の父親である悟空の姿を彷彿とさせた。

悟飯の背後に位置する場所にいる八百万も彼の背中を悟空のそれと重ね、希望に満ちた笑顔を浮かべている。

悟空のものに及ばない威力とは言えど、悟飯の拳は豪速球以上の威力がある。人間が喰らえば、下手をすれば突き指なり何なりの怪我をするのだが……脳無には効いていないらしかった。

打撃が効かない、若しくはその威力を吸収したり軽減する、個性、持ちだと判断した悟飯は攻撃方法を切り替え、ゼロ距離から気弾を次々と連射していく。

背後且つさほど離れていない場所に八百万達がいる以上、後退は許されない。背後にいる彼女らを守る為にも相手に攻撃を加える隙を一切与えることなく、気弾を撃ち込んだ。

脳無に命中した気弾は次々と爆ぜて、煙を巻き起こす。脳無の体は呆氣なく煙に覆い尽くされ、その姿は目視出来なくなつた。果たして気弾はその化け物に通じたのか否か。その答えは、煙が晴れるまで誰にも分からぬ。

黒霧はただただ黙つて煙に覆い尽くされた脳無を見守り、八百万は神に祈りを捧げるシスターのようにして悟飯の勝利を願う。そして悟飯は、油断のない立ち姿で煙の方を見据える。

再び一時の静寂が流れる。その最中で吹き抜けた冬風が煙を晴らす。そして露わになつたのは――

「き、効いてない……！」

掠り傷一つさえも見られない様子で威風堂々と佇む脳無の姿だった。

「そ、そんな……」

八百万にとつて、悟飯は自分より遥か上の実力者。彼女自身、彼が群を抜く実力者であることを察している。恐らく彼の父である悟空を除いてしまえば、自分の身近にいる人の中でも一番強い。そんな彼の攻撃すらも脳無には通じていないのだ。彼女が絶望の表情になるの

も無理はない。

絶望の表情を浮かべる彼女と驚きを隠せずに目を見開く悟飯を前に、黒霧は彼らを嘲笑いながら語る。

「効く訳がないでしよう。それ相応にこちらも対策を施したのですから。ここからが脳無の本領発揮ですよ！」

黒霧が腕を掲げながら言うと、脳無が拳を握つて体全体に力を込め始める。その次の瞬間、脳無の肉体は赤く発光し、その表面からは蒸気が立ち上り始めた。

明らかな見た目の変化に、警戒心を高めた悟飯が構えを取つたその瞬間。

「ツ!?

脳無は構えを取つて腰を落とした悟飯の眼前に迫り、その格闘家並みに鍛え抜かれた腕でストレートを繰り出す。

咄嗟に腕を交差させて拳を防いだ悟飯だったが、それでもなお勢いを殺し切れなかつた。今いる位置から砂煙を巻き上げながら数m程後退させられる。

堅牢な岩の如く足腰で踏ん張りを利かせると共に地面に爪を立てることで、ようやく勢いを殺せた。

地面に手をついたまま、クラウチングスタートと似たような構えから反撃に転じようとした悟飯であつたが、相手はそんな暇も与えてくれない。すぐさま地面を蹴つて、砲弾のような勢いで迫ってきた。

しかも、そのスピードは戦闘開始時の2倍近くにも跳ね上がつているではないか。

突然のことが起きたと、人間は何が起こつたのかを把握するまでに時間がかかるてしまう。故に、どれほど短い時間であろうとも体が硬直してしまうものだ。

そのせいで悟飯は脳無の動きに反応出来ず、右頬に弧を描きながら振るわれた脳無の拳を喰らってしまう。

「いやあっ！悟飯さん！」

脳無の拳を頬に受けてフラつく悟飯を目にした八百万が、悲鳴を上げながら彼の名を呼ぶ。その声には、悟飯の命が奪われることに対する

る拒否が表れていた。

しかし、脳無は止まらない。黒霧の命令通りに悟飯を殺すまでは。人間で言う、「はあっ！」や「うりやあっ！」などのような気合いの掛け声の代わりだろうか。脳無は、獣のような呻き声を上げながら両腕を猛スピードで振り抜いて乱打を繰り出した。

体勢が崩されたせいもあってか、悟飯はその身に脳無の乱打を諸に喰らってしまう。頬や額に猛スピードで拳が掠つたせいで皮膚が切れ、鮮血が垂れた。所々に痣や内出血した痕もあり、とても痛々しい。「はあっ……はあっ……。オレの攻撃を喰らう前と比べて、遙かにパワー、スピード、攻撃のキレが増している……。まさか、蓄積させたダメージをエネルギーか何かに変換して……!?」

肩で息をし、口元の血を親指で拭いながら悟飯は分析する。彼の分析を聞くと、黒霧は感心したように黄色い目を微かに見開いては称賛した。

「ほう……素晴らしい分析力。仰る通りですよ。どうせ見抜かれてしまつたのだから教えて差し上げましょ。その脳無は、”リベンジ”，という、個性，を持つています。

凡ゆる攻撃で受けたダメージを蓄積し、それが許容値の限界まで達すると自然とエネルギーへと変換される。そのエネルギーは膨大な熱量を持っていましてね。いつまでも体の内部に残つたままでは熱が籠り、動きが鈍くなってしまうのです。それを防ぐ為に、エネルギーは蒸気と化して体外に放出されるのですよ。人間が、激しい運動の後で熱つた体を冷やす為に汗をかくようになってるのと同じことです」

（くそつ……蓄積出来るダメージの許容値を超える程のダメージを叩き込むのは通用しないか……！）

“個性，の詳細を事細かに説明してくれたのはありがたいことだが、話の途中で思いついた策は通用しなかつたことが分かった。

早とちりでしかなかつたことに悟飯は歯痒い思いをし、悔しげに歯を食い縛る。

仮にエネルギーが完全に消費されるのを待つたとしても、それが無

くなれば再び許容値までダメージが蓄積されてエネルギーに変換される……。その繰り返しでしかない。

そんな悔しさに身を焼き焦がす悟飯を嘲るかのように脳無の次なる攻撃が繰り出される。

「ぐあっ……！」

叩き込まれたのは、ボディーブロー。自分の土手つ腹に叩き込んでくれたお礼だと言わんばかりに繰り出されたそれは悟飯の鳩尾を穿ち、肺の中の空気を吐き出させる。

腕が完全に振り抜かれると同時に拳が押し込まれ、悟飯の体はボールのようにして吹き飛んでいく。ぐるぐると回る視界の中、腹部を強打されたせいで涎が口の中に溜まる。水中で溺れさせられたかのような気分だつた。

吹き飛んでいく悟飯に向け、脳無は自らの顔を向けて狼のように裂けた口を大きく開けた。

開けた口の中に熱が充満し、ジリジリと火の粉を散らす。そしてそのまま、呼吸によつて息を吐き出すような勢いで脳無は炎を吐き出した。

（炎を吐き出した……！人間が持てる、個性、は、一人につづつなんじやないのか！？）

迫り来る火炎を目にした悟飯は口の中に溜まつた涎を地面に吐き捨てながら受け身を取り、一点に集中させた、氣、を形状変化させることで自分の周囲を覆い尽くすバリアを形成した。

“個性”は、一人の人間が持てるのは原則として一つ。いくつかの“個性”の特徴が組み合わさつた複合型の、個性、も存在するにはするのだが、脳無のそれは黒霧の説明からして、リベンジ、と先程の炎が複合したものだという訳ではない。複数の、個性、を一人の人間が持ち合わせるなど、宝くじの一等が当たると同じくらいにありえない話だ。——因みにだが、その確率は0・000005%だ――

炎を防ぎ切つた悟飯が未確認生物を発見したかのように目を見開いて驚いている様子を見て、黒霧は観客の反応を楽しむマジシャンのようにして楽しげに言う。

「脳無が、個性、を複数持つことに驚きのようですね。ええ、お察しの通りです。こいつは、貴方方人間から逸脱した存在だとだけ言つておきます」

語りながらも、黒霧は考えた。

（それにしても流石は孫家。彼だけ脳無の攻撃を喰らつてもなお、受け身を取る余裕まであるとは。このままでは焦れつたいだけですね）

そして、ある方向に視線を向けた彼は名案を思いつく。

「脳無、狙いを変えなさい！そこにいるポニー・テールの少女を殺すのです！」

「?」

悟飯が引き離されたことは相手にとつて好都合でしかなかつた。黒霧に命じられた脳無は、ゆっくりと八百万の方を振り仰ぎ、ぎょろりとした瞳で彼女を見据えた。

「つ？こ、来ないで！」

明確に向けられた殺意によつて、八百万の体は硬直してしまつ。震える声で脳無の接近を拒むも、悪あがきでしかない。一度でも殺せと命じられた以上、脳無に声が届くことはないのだ。

脳無の右腕——その手首から先の部分が、強靭な金属で出来たチップソーに変化する。機械音を響かせ、それを回転させながら脳無は一歩、また一歩と八百万に接近。一気に突進すれば済む話だというのに地面を踏みしめながらゆっくりと歩くその姿は、恐怖で体を震わせ、涙を零す八百万を見て楽しんでいるかのようだ。

「いやつ……！いやあつ!!」

年相応の拒否を示す行動として、幼い子供がイヤイヤをするようにして八百万はかぶりを振る。

このままでは彼女の命が危ないと思つた瞬間。悟飯の体は勝手に動いていた。

「百おおおおお!!!!」

彼女の名前を叫びながら悟飯は地面を蹴る。魔物に捕らえられた姫を救出せんとする勇者のような迫力を放ちながら、彼は八百万の元に辿り着き……。

「ひやつ!？」

力に任せて、己の左手で彼女を突き飛ばす。

地面に倒れ込んだ彼女を見て、悟飯がホツとしたと同時に「——脳無のチップソーと化した右腕が振り下ろされた……。



「ヽヽヽらで良いでしょ。止まりなさい、脳無」

——ギヤリギヤリギヤリ！と何かを切断したかのような音が聞こえた。直後、何かが地面に落下したかのような音も聞こえた。脳無に、動きを止めるように指示を出す黒霧の声もまた耳に届いた。

(……生きて、る？もしや、悟飯さんが……？)

そんな不気味な音を耳にしながら、八百万は自分の無事を知る。それと同時に、悟飯が庇ってくれたのだろうということも。一先ず、彼に精一杯の笑顔を向けてお礼を伝えなければと思い、振り向こうとした瞬間だった。

「——があ、あ、あ、あ、あ、あ、あ”つつつつ!!!」

突如、彼女の耳に悲鳴——否、耳を劈くかのような絶叫が届く。それが悟飯のものだということに数秒経つてから気が付いた八百万は、弾かれたように声のした方を振り向いた。

「…………え」

視線の先には、あまりにも残酷な光景が広がっていた。脳が剥き出しの化け物、脳無が振り下ろしたチップソーには、赤い液体が付いている。

——鉄のような匂い。その液体が血であることを察するのに時間はかかるなかつた。

地面に目を向ければ、腕のようなものが落下していく、その周囲に

は鮮血が滝のように零れ落ちている。

気が遠くなるような感覚を覚えると同時に恐る恐る視線を上に向ければ……。

「がつ……あ、あ、つ……！」

額に大量の脂汗をかいた悟飯の顔が目に入る。その顔は微かに青ざめ、苦痛に歪んでいた。雨に濡れ、その零が頬を伝うかのような勢いで脂汗を伝わせる彼の視線の先を見れば、彼の左腕——肩を除く部分が全て無くなり、傷口からドバドバと血が零れていた……。

「……悟飯……さん……？」

あまりにも残酷な光景に、悟飯の名前を呼んだ彼女は啞然とする。しかし、それもたつた数秒のことだ。

「いやああああああああああああああああああ!!!!」

すぐさま現実に引き戻された彼女は、目に涙を溜めながら悲鳴を上げた。

「つぐうつ……！」

全身に力を込め、腕の筋肉を収縮させるも血が止まらない。壊れた間欠泉のようにして血が依然噴き出し続いている。悟飯が辛うじて意識を保つていられるのは、前世から培った鋼のような精神力と、前世で全く同じ経験をしたことのおかげだ。普通なら、腕を切断された時点では発生する凄絶な痛みによって気を失うに違いない。

「ほう、随分と大胆にやつたね」

窮地に陥った悟飯達の元に、愉悦と不気味さに満ちた声が届いた。

「！先生。こちらにおられましたか」

黒霧が声の方へ振り仰ぐと、悟空と闘いを繰り広げた件の黒スーツの男がいた。黒スーツの男は苦笑しながら言う。

「いやあ……僕としたことが、孫悟空を殺すことに夢中になりすぎてね。折角施した細工を台無しにしてしまった。今しがた様子を見てきたが、もうじきここにヒーローが駆けつけてくる。早いところ戻ろうか」

彼が提案すると、黒霧は申し訳なさを滲み出させながら吊り上がる黄色い目の目尻を下げて言う。

「承知しました。……申し訳ありません。即死させるには至りませんでした」

「いや、良いさ。その出血量だ。いずれにせよ出血多量でそのうち死ぬ。自分の息子を失えば、孫悟空も気が狂うことだろうさ。楽しみだね……。はつはつは……！」

彼の謝罪に対し、黒スーツの男は何も気にしていない様子で、部下を励ます会社の上司のようにして彼の肩に手を置きながら言う。そして彼は、人の形を崩して黒い靄となつた黒霧の中に足を踏み入れては高笑いを残し、脳無諸共忽然こうぜんと消えた。

（百……。無事で、良かつた……）

悟飯には立ち去る彼らに注意を向ける余裕も無かつた。必死で保つてきた意識にも限界が訪れ、視界がぐらりと揺れる。八百万に傷一つないことに安堵した彼は、青ざめた顔のまま消耗し切つた儂い微笑みを浮かべて地面に倒れ、意識を閉ざしてしまつたのだつた。

「だ、だめ……！ 悟飯さん……！ 死んじやだめですわ……！ 悟飯さん、しつかりしてくださいまし！ 悟飯さん！ 誰か……救けて……！ 誰かあああああ!!!!」

普段の八百万ならば、即座に彼の治療に動いていたことだろうが……8歳の少女にとって、大切な幼馴染の腕が切断されたのを見たショックは大き過ぎた。それ故、パニック状態に陥り、誰かに助けを求めることが出来ない。

雪がしんしんと降りしきる中に残つたのは……涙を零しながら、救世主を求める八百万の姿だつた……。

ヒーローを目指すには残酷すぎる原点。それを、悟飯はその身を以つて体感したのである。



八百万自身も、氣絶した悟飯もその後のことはよく覚えていない。八百万もある後に駆けつけてきたヒーロー達に、パニックに陥つたままながらも必死で状況を説明した後、泣き疲れて眠つてしまつたのだ。

全てが終わつた後に目を覚ました悟空や自分の両親曰く、泣き疲れて眠つた後もずっと悟飯の名前を呼びながらうなされていたらしい。八百万が目を覚ましたのは、事件が起こつた日から丸一日経つた後。悟飯に至つては、1週間ほど目を覚まさなかつた。

命が助かつたことは喜ばしいことだつたが、一思いに喜ぶことなど出来なかつた。当然だ。自分の目の前で、幼馴染が自分のことを庇つたことによつて左腕を失つたのだから、心の傷として残らない訳がない。あの事件は八百万にとつてのトラウマであり、悟飯の絶叫も昨日のことのよう覚えていて、ふとした時に思い出してしまう。医者の話によれば、凄絶な殺意や惡意を感じた途端、トラウマが再発してパニック状態に陥り、指一本すらも動かせなくなるだらうとのことだつた。

その事件が心に深く傷をつけたのは悟飯にとつても同じことだつた。彼にとつての後悔は、八百万を恐怖に晒し、泣かせたことだ。自分がもつと強ければ……敵ヴィランから彼女を守れる存在であつたならば、彼女に恐怖を抱かせることはなかつたし、左腕を失つたことで彼女を泣かせることもなかつたはず。当時は氣絶する瞬間に百が無事で良かつた、と思つた悟飯であつたが、今やその時の自分を殴りたいという怒りの炎で身を焼き焦がすこともしばしばある。幼馴染が腕を失つたのを見て、無事な訳がないじゃないか、と後になつてから気がついた。

その時の後悔は、強くなりたいという願望へといつしか昇華した。あの事件は、紛れもなく彼が「強く偉大なヒーロー」になりたいと思うようになったきっかけなのだ。

八百万は、悟飯の義手となつた左腕を再び撫でながら誓う。

(私がもつと立派であつたならば、悟飯さんの左腕が失われることはなかつた。必ずや、このお方の隣に立つて支えられるヒーローになつて償いを……！)

悟飯に左腕を失わせたことは、いつしか彼女の内で罪となつていった。そして彼女は、「悟飯の隣に立てる立派なヒーロー」を目指すようになつたのだ。そして、彼を全力で支えることで左腕を失わせた分の償いを返すのである。

「百？どうしたんだい？」

悲しげな目から一変。強い意志を宿した凜々たる瞳の八百万を見て、悟飯は尋ねた。

「いいえ……何でもありませんわ」

彼に対し、八百万は微笑みを浮かべながら首を振る。

そして、二人は誓いを胸に抱いて足並みを揃えたまま自分達の通う中学校へと向かうのであつた。

5話　いざ挑め！雄英入試！

時が流れ、日付は2月26日。悟飯にとつてのヒーローを目指す原点でもあり、大いなる悲劇でもあつたあの日よりも遙かに厳しい冷気が、針のようにして肌を突き刺す……。そんな時期だ。

2月の終わりも近いというのに、会社で無理矢理残業をさせられている会社員のように寒気が居残り続けている。仕事が終わつていなければ、それを期限内に終わらせるのも大事だが……残業のしすぎで生活リズムを崩すのは体に支障をきたす。善良な人間が、彼らには早く帰つてしまつかりと休んでほしいと思うように、この寒さにも早いところご帰宅いただきたいものである。——まあ、寒さには人間と違つて帰るべき家はないのかもしれないが――

防寒対策をしつかりしていると言えども寒さは簡単に遮断出来るものではない。母の美空特製である濃紺のマフラーに埋めていた、口元から下の部分を外気に晒した悟飯は「寒いな……」と呟きながら目の前にある建物を見上げた。

「昨日の筆記試験の時も思つたけど、相変わらず大きい……」

これまで、叔父のラディツツや、彼より上の強さであるナツパとベジータ、宇宙の帝王であるフリーザに、悪夢を生み出した殺人兵器の人造人間姉弟のような数々の強敵と対峙してきた悟飯だが、目の前にある建物の大きさには舌を巻かざるを得なかつた。

都会に聳^{そび}え立つような大きさである、ガラス張りのビルが四つも並んだ形になつているその建物は……どの方角から見てもアルファベットのHに見える。

前世の悟飯の弟子であつたトランクスの母親であり、ベジータの妻であり、更に言えば前世の父親の友でもあつたブルマ。彼女の父親を社長としていた企業、カプセルコー・ポレーションの研究所が可愛く思えてしまうくらいの大きさがある。——因みに、その研究所は彼女の父親の研究所兼自宅である。つまり、ブルマの自宅でもあつた為、悟飯自身も何度か訪れた経験があつた——

その門は、普段は莊厳なセキュリティゲートとなつており、今日は

特別な事情で開放されている。

そんな国内有数とも言えるであろう巨大な建物は校舎なのだ。これ程に巨大な校舎を持つ学校は日本において数少ない。悟飯は今、国立雄英高等学校の校門の目の前に立っている。

そして、今日、2月26日は雄英の入試。その実技試験の日である。

つい昨日には筆記試験があつたばかり。先に彼なりに感じた筆記試験への手応えを話しておけば……上出来であつた。そもそもの話、彼は前世から頭が良かつた。それに加えて、今世は文武両道の大和撫子の幼馴染、八百万百という頼もしい味方がいる。彼女と共に何度も筆記の対策をしてきたおかげで何一つ問題はなかつた。

「にしても、いよいよ実技試験か……！大丈夫、いつも通りやるだけだ」

筆記試験も勿論大事だが、悟飯にとつては今日の実技試験こそが本番。この為に今日という今日まで己を鍛え上げてきた。そうであるからこそ、第一関門の筆記試験を昨日のうちに終え、自分なりに上出来だと思える結果を出せたのは、彼に大きな安心を齎した。これでこそ、心配なく実技試験に全てを注ぎ込めるというものだ。

全てにおいて最も大切であると言える基礎を徹底的に磨き上げてくれた父の悟空に、”氣”の応用面を仕上げてくれた師匠と、極限の予測を授けてくれたもう一人の師匠。彼らの期待と、母の美空と八百万の暖かな激励を背負つて、悟飯はここに立つている。——因みに少し前に推薦入試があつたばかりであり、それに挑んだ八百万は見事合格を勝ち取った――

彼らに応える為にも、何としても受からなければなるまい。絶対に合格してやる、と固く強い意志を宿した瞳で悟飯は拳を握りしめた。

そして、いざ雄英の敷地内に足を踏み入れようとしたその時。視界の端で、一枚の紙がひらりと地面に落下したのが目に入った。受験の日に、ただの紙を持ち歩くような人はいない。恐らくは受験票か何かを落としてしまつたのだろう。

紙が落ちた先を見れば、栗色の髪でショートボブをした少女が歩い

ているのが分かつた。その受験票らしき紙は、彼女のものであろうが……彼女自身はそれが落ちたことに気が付いていないらしい。

ヒーロー志望ならば、誰かの為に世話を焼くのも当然。そもそも、受験票は受験において必須のものだ。それを拾わなければ、困るのはそれを落とした本人。それを落としたことに気がついたのに無視をするのは、余程性根の腐った人間がすることだ。

無論、悟飯はそういう人間ではないし、ヒーロー志望として当然のことをする人間。地面に落ちた受験票に手を伸ばそうとしたが……それよりも先に、もさもさした癖つ毛の緑髪を持つた少年が受験票を拾つて、栗色のショートボブの少女に手渡した。

一見地味に思える見た目だが、短く刈り上げられた髪と使い古された黄色いリュックは爽やかさと元気の良さを感じさせる。何より注目すべきは、その肉体。乱れなくしっかりと着こなされた制服のブレザーの上からであつても、鍛えあげられた肉体が薄らと見てとれた。その肉体は、間違いなく彼の努力の証であろう。

「わわっ、受験票落としてた!? 気がつかなかつたよ……。あのままだつたら受けられないとこらだつたよ！ ありがとう！」

「どんでもない。大したことはしてないよ。それに、折角受けに来たんだ。それなら、絶対受かりたいじやないか。僕としても、君ともしても」

顔を上げた先にあるのは、2人の中学生達が何気ない会話をする姿。悟飯は、今は自分のことを優先したい時であるはずなのに他人を気遣える、緑髪の少年を尊敬した。

こういう人物こそ、雄英に入学するのに相応しいだろうと悟飯は思う。そして、そんなヒーローらしい彼と、会話を交わす栗色の髪の少女。その両方にも受かつてほしいとも。「よし……。いつちよやるか」

今一度、悟飯のやる気が木を焚べられた炎のようにして激しく燃え盛る。

彼なりに父の真似をして大胆不敵に笑い、拳を鳴らしながら雄英の校門へと足を踏み入れたのであつた。

「……」

「？どうしたの？」

「いや、余計に落ちることが出来なくなつたなつて思つてね。じゃ、お互い頑張ろう！」

「うん、頑張ろう！」



「よう、リスナー諸君！今日は俺のライブへようこそ！Everybody
o d y s a y H E Y！」

ステージ上に立つ、トサカのような金髪に金色のグラスをしたサングラス、ヘッドホンや首元のスピーカーが特徴である彼は、ボイスヒーロー”プレゼントマイク”。雄英高校に勤める教師の1人だ。そのDJらしき格好に違わぬハイテンションなボイスは、実技試験の概要を説明する会場である講堂全体に余すことなく響き渡った。

そんな彼が友達に挨拶するかのようないで披露したのは、彼がパーソナリティを務めるラジオ番組における挨拶を促す際の口上なのだが……受験前で緊迫した状況において、彼の声に答えるものは誰一人居なかつた。受験生達は何も悪くない。彼らは、至つて眞面目に受験に臨もうとしているだけである。

お笑い芸人がネタを披露したものの、見事にすべつてしまつた時のような静けさが辺りを支配する。プレゼントマイクのラジオ番組は、数あるそれの中でも有名である為、悟飯自身も何度か放送を聞いたことがある。だからこそ、今の状況に苦笑するしかなかつた。

それでもなお、彼は変わらぬハイテンションで進行を進めていく。これもプロヒーローとしての精神力故だろうか。

（凄いなあ、プレゼントマイク……）

彼のメンタルの強さを素直に尊敬しながら、悟飯は入試の概要の説明に耳を傾けた。

まず、試験の形式は、制限時間10分の模擬市街地演習。受験生達には、試験会場がそれぞれで振り分けられており、そこで試験を行っていくらしい。

そして、大まかな内容は……仮想敵^{ヴィラン}の破壊や行動不能にしたことによつて稼いだポイント数を競うというもの。それらは1P、2P、3Pの計三種に分かれており、形や戦い方、攻略難易度も変化していく。これによつて戦闘能力や状況判断力を見るのであろう。勿論、他人への攻撃や故意な妨害といったアンチヒーローな行為はご法度。即座に失格にされてしまう。

大まかなルールが分かつたところで、一つだけ注目すべき点がある。それは、0Pの仮想敵^{ヴィラン}の存在だ。

配布されたプリントには記載されているが、プレゼントマイクの口からは何も説明がなかつた存在。七三分けに眼鏡をかけるという、如何にも真面目そのものな見た目の少年が0Pについて言及したことでの説明が為された。受験生達は、堂々と挙手をした彼の勇気を称賛したことだろう。

プレゼントマイク曰く、0Pの敵^{ヴィラン}はゲームにおけるギミックのような無敵の障害物にあたる存在らしい。無敵ならば、いくら相手をしようと意味がない。制限時間が設けられている以上、0Pを相手にするということは、ゲームのタイムアタックにおいて、無敵なのでダメージが効かないモブキャラをなんとか倒そうと必死に試みているようなものだ。

時間は有限。何をしようが、過ぎ去つた時間を戻す術はない。確かに障害物を相手取るのは時間の無駄。プレゼントマイクが逃げることを勧めたのも納得がいく。……しかし。悟飯には、どうしても突つかかるところがあった。

テストの時に漢字をド忘れしたもの、それがあと少しで思い出せる……というところまで来ているかと思えば、やっぱり思い出せない時のような感覚を覚えて、モヤモヤしていた。

逃げて他に出来ることを探すという決定をする為の決断力を見ると言えば、それらしい氣がする。しかし、どうにもピンとこない。そもそも、単なる障害物としてのギミックをわざわざ用意する必要がどこにあるのだろうか？

周りが「まんまゲームみたいな話だ」と呟き合う中、悟飯は……。（このOP……本当にただの障害物なのか？）

一人懐疑心が止むことなく、ぐるぐると無限に続く螺旋階段のようにして思考を巡らせていたのだった。

「——さて、ここまで試験の概要をプレゼンしてきた訳だが。最後に、リスナー諸君には我が校の校訓をお送りしよう」

しばらくの間、思考で頭を巡らせていた悟飯だったが、いつものハイテンションがなりを潜めたプレゼントマイクの声で思考を中断し、顔を上げた。

「かの英雄、ナポレオン・ボナパルトは言つた！『眞の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていく者』と！」

—Pラuルsウlルtトrラaア!!—

「皆、良き受難を！」

言葉の力とは凄まじいものだ。言霊が存在するというのも、案外間違つた話ではないのかもしれない。

「Pラuルsウlルtトrラaア」。訳して、「更に向こうへ」。今まで雄英の卒業生である、父親の悟空からこの校訓を聞いたことはあつた。それでも、雄英の校舎の中で、激励の意味を込めて放たれた校訓は一味も二味も違つた。

これを聞いた瞬間、悟飯は自分の体の底からゾクツとした感覚が押し寄せてくるのを感じた。その感覚は恐怖からきたものではない。例えば、有名なオーケストラ団体の演奏を目の前で聞いた時とか、迫力満点の劇を目の前で見た時とか、声優の臨場感を感じさせる凄まじい演技を聞いた時とか。そんな時に押し寄せてくる感覚と似ていた。言わば、この感覚は感動や圧巻によるものであつた。

それを感じたからこそ、ようやくここまで来たんだ、今……自分は間違いなく雄英に挑んでいるんだ、という実感が余計に湧いてきた。

(この程度の緊張……。なんてことない！ドンと構えろ！）

思わず口の端が吊り上がる。体が武者震いする。現在の緊迫感とこれから期待からくるこの震えこそ、まさにその名に相応しかつた。

何が来ようが絶対に負けない。折れない。必ず受かる。そんな強い思いを抱いた悟飯は、バスに揺られて自分の指定された試験会場に向かっていった。

「いやいや、広すぎる……！試験会場一つが街一つと同じくらいってどうなってるんだ……！」

いざ試験会場に辿り着いた悟飯は、準備運動をしながらも試験会場の広さに圧巻されていた。

彼の目の前には、魔界の門のような莊厳さを感じさせる巨大なゲートがある。かの有名な文豪、芥川龍之介の小説に出てくる羅生門もこれ程の巨大さであったのだろうか。何にせよ、このゲートの先には別の世界が広がっているのではないか……。そんなことさえ考える。

更に周りを見渡せば、あちこちに都会を思わせるビルがズンと佇んでいる。5階建てやら3階建てやら高さはバラバラであるが、共通する的是……それらは全て視界を遮る程の高さがあるということだ。

ビルとビルの間の小道は、路地裏のように入り組んでいそうである。あの狭さだ。戦闘に不利な“個性”を持つ受験生達が仮想敵か自身を隠したり、逃げたりするには最適だろう。

そして、ビルの窓は田舎の家のようにして全て開け放たれている。風が入り込み、一気に吹き抜けていくのは想像に難くない。今が冬であるから、風を浴びるのは地獄でしかないだろうが……暑い夏であるならば、清々しく風が吹き抜けて、心地よく涼むことが出来るだろう。そんな景色に圧巻されながらも、悟飯は体をほぐして準備運動を続ける。彼が身を包んでいるのは、果てしなく黒に近い藍色に統一されたスポーツウェア。ハーフパンツの下にはタイツロングパンツを履

いているが、生地が薄い故に彼の鍛え上げられた下半身のラインを晒していた。後から暑くなることを考慮してか、フード付きのトップスの袖を捲つており、その鍛え抜かれた腕の筋肉のラインも明らかに分かる。

そもそも、彼の着るスポーツウェアは、彼自身の体のラインに沿うように程よくフィットする為、程よく筋肉質な男性を模した彫刻のように逞しくも美しい体全体のラインがよく分かるようになっていた。

彼の顔立ちが父の悟空こと武神にそっくりなことと、鍛え抜かれた体は他の受験生の目をよく惹きつける。それ故――

「見ろよ、あいつの体。鍛え鍛え上げられてるぞ……！ 格闘家かなんかか？」

「つか、武神に顔付き似てね？俺ら終わつたんじや……」

「気の抜けた顔してるけど、油断出来ないぞ……。片手が義手だぞ、義手。それだけやべえ事件から生き残つたって証拠だろうが」

「顔の傷と堂々とした立ち振る舞いもな」

――こんな風に反応は様々であれ、周囲の受験生達に注目された。

――余談だが、今世も悟飯には額の左側から左頬にかけて傷が残っている。この傷は、彼が12歳の頃に近所で暴れ回っていた殺人犯の敵ヴァランから近所の子供達を庇つた時にいたものだ――

なんか注目されてるな、と思いつつも、悟飯は彼らの視線を大して気にしなかつた。ある程度の準備運動を終えた彼は、精神統一を試みる為に立つたままで瞑想を始めた。瞑想は集中力を高めることにおいて、とても効果を發揮してくれる行動。父の悟空と彼の”氣”的応用を仕上げてくれた師匠もよくやっている行動で、悟飯にとつても大事な出来事の前にはこれをやることがルーティンとなっていた。

更に、予め”氣”を高めておくことでの開放することが出来るようになる。これで準備は完了した。悟飯は、然程時間も要さずに万全の状態になつたのだ。

ここで、後はスタートの合図を待つだけ。自分の世界へと入り込み、周りの受験生達の声をシャットアウトする。そうしながらも、ス

タートの合図にも注意を向け、今か今かと待ち続ける。

受験生達の声をシャットアウトした故、彼らの声は耳に入らない。ただ静寂が流れる。まるで集中力を高めた悟飯を焦らして、彼が築き上げたペースを崩してしまおうとするかのように。だが、悟飯には長年の死闘を潜り抜けたことで身についた忍耐力がある。この程度の焦らしで彼が動じる訳がなかつた。焦りなく、その時をじつと待ち受ける。

ズズズズズ……と音を立てながら、巨大なゲートが開く。スタートの時は近い。地面が微かに揺れるのを感じ取りながら、悟飯は確信した。

そして——賽は投げられた。

「はい、スタート！」

気の抜けたスタートの合図が聞こえ、悟飯はそれと同時に”氣”を開放する。

炎のように激しく噴き出す白いオーラを纏いながら地面を蹴つて、彼は弾かれたビリヤードの球のように飛び出した。

その場には、悟飯の飛び出した際の勢いで舞い上がった土煙と風圧を受けて呆然とする他の受験生達の姿だけが残る。

一瞬、フライングしてしまつたのかと思つたが……悟飯の行動は正解だつた。

『標的補足、ブツ殺ス！』

標的が、飛んで火に入る夏の虫の如く現れてくれた。

物騒な言葉を口にしながら現れたのは、1Pの仮想敵^{バイラン}。一輪車のような車輪を持ち、「1」の数字が白いペンキで刻まれた部分が盾のように見える腕を持つ。それ以外は、特に防御力を補強するような作りが見られない。端的に表すとすれば、速いが脆い。それが1Pの仮想敵^{バイラン}だろう。

1Pの仮想敵^{バイラン}が3体、群れとなつて現れたが……大した障害にもならない。

「だりやあつ！」

気合いの一聲と共に悟飯は拳を振るつて殴り抜けた。その動きは

流れる水の如く、一切の無駄がない。

悟飯の拳は、たった一撃で1Pの敵^{ヴイラン}達を粉碎した。彼の拳は見事に彼らの内部にある精密機器を貫いており、目の前に立ち塞がついた脆い障害物は容易く爆ぜた。

『パ、パンチ一発で爆発したアアアアアア!?』

機械を己の拳で貫いて爆発させるなど、漫画やコミックでしか見たことのない光景だろう。それを目の前、かつ現実で目にした受験生達は口をあんぐりと開けながら息ぴつたりに叫んだ。

「あれっ、思ったよりも脆かった」

当の本人は、爆発が起きたことによる逆光を背中に受けながらキヨトンとした顔でそんなことを呟いているのであつた。

——孫悟飯、誰よりも早く好スタートを切り、颯爽と3P獲得。

6話 合格を目指して！解き放て、超かめはめ波！

実技試験が始まつてから、既に4分と少しの時間が経過していた。誰よりも早く飛び出した悟飯。対して、己の拳で仮想敵を粉碎した彼の強さに唖然としていた生徒達であったが、試験監督を務める教師の声で慌てて動き始めた。誰しもが後れを取り戻そうと死に物狂いで仮想敵^{ヴィラン}を探し回っていた。

焦りながらも、遅れを取り戻そうと奮闘する受験生がここにもいた。

「これで……32Pつ！」

己の獲得したポイントに、たつた今破壊した仮想敵^{ヴィラン}のポイントを加算せながら宣言する少年は、一見すると地味で普通な顔付きをしていた。ただ……彼には、他の誰にもない唯一無二の特徴がある。

それは、彼の腰の辺りに生えている尻尾だ。丸太並みに太く、ボディービルダーの剛腕並みに鍛え上げられた強靭な尻尾。この尻尾こそが、この少年の”個性”だ。彼の名を、尾白猿夫という。その名に「猿」の字が含まれているのは伊達ではない。

事実、彼はこれまで仮想敵^{ヴィラン}をヒット&アウェイで確実に叩きのめし、今も都会を模した試験会場の電灯や案内板の一部に尻尾を巻き付け、巻き付けた部分を解いて遠心力を利用しながら移動していた。その様は、まさに密林の中に住む猿そのものである。

彼の脳裏に思い浮かぶのは、額の左側から左頬にかけて、鋭い刃物で切り付けられたかのような傷痕を残した精悍な顔立ちをした少年の顔。誰よりも早く飛び出したのだから、自分よりも遥かに多くのポイント稼いでいるに違いない。仮想敵^{ヴィラン}を一撃で粉碎する強さと、それらを粉碎した後に次のターゲットを求めて白い炎のようなオーラを放出しながら飛んでいくスピードが、尾白の推測を裏付けていた。

だからこそ、後れをとる訳にはいかない。何より、同年代にあれほどに凄い男がいるのだと知った以上、張り切る他ないではないか。「雄英には、彼のような凄い人が来ている……ただでさえ、俺の”個

性”は冴えないんだ。自分の実力で乗り越えるしかないっ!!」

——尾白は思い出す。

幼い頃から”個性”が地味だと馬鹿にされ、見た目も普通で大方ヒーローとして売れないと嘲笑われ続けたことを。その度に何度も悔しい思いをしたことが……。だからこそ、そんな風に自分を馬鹿にした輩を見返してやろうとストイックに己の体とその一部である尻尾を鍛え続けてきた。

馬鹿にされた時の悔しさこそが、彼の原点。オリジン その悔しさを思い出す度に活力が湧き上がり、何でも出来る気がしてくる。

”個性”が地味、見た目も地味。それなら、実力で這い上がるしかない。人並みならぬ程に積んできた努力を水の泡にしない為にも、尾白は必死で戦っていた。

その後もしなやか且つ強靭な尻尾を鞭のように振るい、順調に仮想敵ライラン を破壊して。ポイント稼いでいく尾白であつたが……。

「つく……こで体力の消耗が響いてくるなんて……！こんな所で立ち止まる訳にはいかないのに！」

体力の消耗が増えてきた影響か、遠距離攻撃持ちの3Pが与えられた仮想敵ライラン に苦戦していた。

背中に取り付けられた2対の発射台から大量のミサイルを放つてくるそれは、戦車というに相応しい。それがある程度自身を追尾する形で迫つてくるのだから恐ろしいものだ。更に、それに備わっているのは申し分ない攻撃力のみではない。申し分ない防御力も備わっている。他の2体よりも遥かに固く、丈夫な装甲。それらよりも動きは遅いが、代わりに半端な攻撃では破壊出来ないようになっている。破壊する為の攻撃。その最適解を加味した上で、考えながら攻撃しなければならない。だからこそ、攻略難易度が一番上のものとして設定されているのだ。

息を整えようとすると尾白に、容赦なく次々とミサイルが迫る。尻尾で何とか弾こうにもそう上手くいく芸当ではなく、逃げることを余儀なくされる。彼が苦戦しているのは明らかであった。

そんな彼に手を差し伸べんとする者がいた。

突如、上空から黄色に輝く光の弾が彼の元に降り注いでくる。それは尾白を追尾するミサイルに向けて飛んでいき、爆ぜさせた。

「ツ!」

何が起こつたのか理解出来ず、咄嗟に光の弾が飛んできた方向を振り返る。

その先にあつたのは……尾白の方へ向けて掌を翳^{かざ}し、空中に浮いている悟飯の姿。

悟飯は、着地すると同時に3Pを見据えながら言った。
「キミ! 3Pの放つミサイルは、オレが撃ち落とす! 本体の撃破に集中するんだ!」

試験中なら、誰しもが自分のことを優先したがるものだ。自身の合格が、夢がかかっているのだから、そうなるのは無理もない話。

だが……どうしたことだ。目の前の少年は、他人に気を遣う余裕があるではないか。合格することへの確信ゆえか、元々の善人としての性か。他人の心を読める訳ではない為、尾白にはどちらなのか分からぬ。それでも、恐らくは後者だろうと彼は思った。

「ああ、済まない……!」

彼の善意から来る行動に心の底から感謝し、尾白は3Pを撃破する為に動き出した。周囲の木や電灯を利用して、木から木へと飛び移るように3Pを翻弄しながら、その懷へ接近。標的を撃墜すると言わんばかりに3Pの放つミサイルが再び狙いを定め、猛威を振るわんとする。しかし、発射されたそれは決して尾白に命中しないし、迫りもない。

「はあっ!」

何故ならば、ミサイルが発射されたその瞬間、悟飯が軌道を見切つて張り巡らされた蜘蛛の巣のように高密度の気弾を発射して相殺するからだ。ミサイル一つも逃さない高密度。それなのに、尾白には一発も攻撃を当てない正確さを損なうことがない。

あまりに子供とは思えない程の高度な技術に、尾白は舌を巻いた。

悟飯の正確な援護により、尾白は遂に3Pの懷に潜り込んだ。

「でえりやあっ!」

地に足を付け、腰の入った状態で繰り出された左脚での中段回し蹴り、龍の尾の如く振られた強靱な尻尾の殴打、右足での上段後ろ回し蹴りの三段打撃は、3Pの硬い装甲を貫いて見事にひしゃげさせた。

（た、倒せた……！）

助力を受けながらも、目の前に立ち塞がっていた壁を乗り越えられた。その達成感に笑みを浮かべて、グッと拳を握りながら尾白は悟飯に向けて頭を下げた。

「ありがとう。君のおかげで救かつた」

「いや、礼を言われる程のことはしてないさ。ヒーローを目指す者同士、助け合いも大事だからね」

そんな彼を救けることが出来て良かつたと笑いながら、悟飯は手を差し出して固く握手を交わした。

その後、悟飯は尾白の腰の辺りから生える強靱な尻尾に視線を移して尋ねた。

「それにしても……その強靱な尻尾がキミの”個性”なのかい？」

「ああ、見ての通りだよ。分かりやすいけれど……地味で冴えないってよく言われるんだ。単なる尻尾で何が出来るんだとか言われてきたけれど、そんな奴らを見返そうと思つてさ。必死で鍛えてここまで来た」

苦笑した後、一転して強い意志を宿した瞳で握った拳を更に強く握りしめながら尾白は言つた。そこから、彼が幾度も馬鹿にされつても、それを跳ね除けて己を鍛え続けてきた長い道のりを垣間見ることが出来た。

尾白から、微かな”個性”に対するコンプレックスを感じ取つた悟飯は彼を勇気付けることにした。

「確かに冴えないかもしれないけど……逆に言えば、キミの”個性”はシンプルだ。冴えなくてシンプルだからこそ、オレは強いと思うけどな」

「えつ？」

これまで出会ってきた他人は、大概が”個性”的ことを馬鹿にしてきた。その形が直接的か遠回しかという違いはあれど、大概そうだつ

た。例外と言えば、両親と心優しい善人のみ。赤の他人である悟飯から自分の”個性”を認めてくれるような言葉が出てきたのは、完全に予想外のことでの尾白は呆けた声を上げた。

悟飯は、指先に作り出した気弾を、そこに乗せたバスケットボールのように器用に回転させながら続ける。

「オレのお父さんの受け売りなんだけどさ、『小細工混じりで複雑な”個性”より、地味でもシンプルで使い勝手の良い”個性”の方が強えと思う』だつてさ。勿論、オレだつてそう思つてる」

「考え方じや筋みたいだけど……オレは思うんだ。そんな地味で冴えないつて言われる”個性”が強個性を打ち破るのはカッコいいってね」

自分の”個性”が認められた。尾白はそのことが嬉しくなった。”個性”を認めてくれた悟飯の存在は、彼にとつての救いに違ひなかつた。

「地味でシンプルだからこそ強い……か。言われたこともなかつたな。ありがとう、励みになるよ」

不思議とやる気が湧いてくる。これも、自分の半身と言つても過言ではない”個性”を認めてもらえたからだろうか。

笑みを浮かべ、自分はまだまだやれると信じてやまない表情になつた尾白を見て、悟飯もまた、余計なお世話ををして正解だつたとしみじみ感じながら笑つた。

「はは、そりや良かつたよ。残り時間も半分近いけれど……お互に頑張ろうね」

「ああ！」

彼らが互いの健闘を祈り合い、再び固く握手を交わした——その瞬間だつた。

突如、体の芯にまで響く程の重々しい地鳴りが轟き、辺りが激しく揺れた。

「何だ……!? 地震か!? うわっ!?」

その揺れでビルの一部が崩れて瓦礫となり、尾白に迫る。

「いや、多分……0Pだ」

揺れの中で動ける人間はそういうことを鑑みた上で、悟飯は尾白に迫る瓦礫を気弾で爆破。軽く飛び散った礫をも消滅させながら答えた。

覚悟の決まりきつた黒い瞳で震源地であろう方向を見据える悟飯。彼のこれからを察したか、尾白がおずおずと尋ねた。

「…………念の為に聞くけどさ、OPをどうする気なんだ？」

悟飯は、体から白い炎のようなオーラを激しく噴き上げさせながら、空中に浮かびつつ答えた。

「破壊する！」この揺れでヤツのデカさはよく分かつた。こんなヤツがいたら……誰かが怪我をするかもしれない。最悪の場合、命を失うかもしれない。それなら、誰かが動かなくちゃな。ヤツを破壊するのはオレが請け負う！キミは、キミに出来ることをやつてくれ！」

そう言い残すと同時に、悟飯は頼んだよと言いたげにサムズアップする。直後、激しい風圧を巻き起こしながら、揺れを引き起こした元凶の方に向けてあつという間に飛んでいつてしまつた。

「…………カッコいいな、彼奴……」

今の自分はどんな顔なのだろう。ヒーローを目の前にした幼き頃の自分のように目を輝かせているんだろうか。そんなことを考えながら、尾白は無意識のうちに呟いていた。

やはり、彼は凄い奴だつたんだと確信しつつ、このままじつとしてなどいられない、と尾白は走り出す。

「そうだ、俺だつてヒーローを目指してるんだ……！未熟な俺なりに出来るることは幾らもあるはず！」

その背中は、まさしくヒーロー志望に相応しい眩いやる氣に満ち溢れていた。



「コイツがOP……」

悟飯の見上げる先に、周囲に立つビル二つ分ほどの大きさを持つ巨大な鉄塊があった。

見れば一眼で分かる。大きさもその装甲の硬さも、これまでの仮想敵ヴァイランとは比べ物にならない。

顔面に当たる部位に取り付けられた赤い発光部位は、異界の魔物の恐ろしい眼光を放つ目のようだ。当然、大きさに比例して重さもとてつもない。その証拠に、その手の置き場になつてているビルは重さに耐えきれず、されるがままにその体に亀裂を走らせていた。

脚部に取り付けられたキャタピラでビルを薙ぎ倒しながら進むその姿こそ……まさしく、弱き人間を蹂躪する兵器。その兵器こそがOPの仮想敵だった。

そのOPの進路を塞ぐかのように仁王立ちする悟飯に対し、他の受験生達は脱兎の如く逃げ惑う。周りのことなどいざ知らず、己の身の安全を優先して。

街の被害なんぞ知つたことか、と進撃し続けるOPの姿は……前世生きていた地球を襲つた悪夢、人造人間17号と18号の姉弟の姿を彷彿とさせる。

（生憎……コイツのように街を破壊する輩には、昔から因縁があるんだ。ここで破壊させてもらうぞ！）

意を決し、逃走を図る受験生の流れに反抗するように地面を蹴つて走る。

悟飯が人間や自動車を逸脱する速度で走り抜けて距離を詰めていく中、OPが腕を振りかぶった。

自分に狙いを定めてきたのかと警戒したが、それは違うのだとすぐに気が付いた。

振りかぶる腕の角度と、首の向いている方向。そこから腕が振り抜かれるであろう場所を予測する。その高度な予測で割り出した位置に居たのは――

「ツ、あんただけでも逃げてっ！怪我してるその子を連れて！早くつ

！」

「ツ、わ、分かつた！」

足を怪我したらしい少女を抱えた少年にそう一喝する、蜜柑の果実のように鮮やかなオレンジのサイドテールが特徴的な少女であった。ましてや、彼女は2人を逃がす為なのか、立ち上がってその場から動かない。深く腰を落として構える彼女であつたが、その頬には冷や汗が垂れ、不安と恐怖を拭いきれない様子だつた。悟飯も、その目で彼女の腕が微かに震えているのを捉えていた。一見すると勇敢にも見えるが……本当は虚勢を張つた子犬のようでか弱い。

悟飯は誓つた。ヒーローを目指すきっかけとなつた残酷な事件が起こつた日に幼馴染の八百万に限つた話ではなく、他の誰にも怖い思いをさせたくない。その為に父のような偉大なヒーローになるのだと。

故に、彼女を見捨てることは決してなかつた。

0Pが腕を振るい、それを振り抜かんとする。空気を裂きながら猛然と迫るそれは、少女に命中——することはなく。

「つありやあツ！」

彼女の前に立ち塞がつた悟飯の繰り出したアツパー・カットによつて、見事に消し飛んだ。単なるアツパー・カットではない。その拳一点に”氣”を集中させて増幅し、大幅に攻撃力を増加させたアツパー・カット。その威力が0Pの防御力を貫き、その現象を引き起こしたのだ。

「え……!? どうなつてるの……？」

突然の出来事にサイドテールの少女は何度も瞬きをするしかない。脅威が去つて気が緩んだ影響だろうか。終いには腰が抜けて、その場に崩れ落ちてしまつた。

「キミ、伏せるんだ！……ずあつ！」

「えつ!? わ、分かつ……きやあつ!」

少女を守つた悟飯は、0Pを消し飛ばす為に拳に集めて増幅した”氣”を爆発させて全身レベルの開放へと昇華させた。

少女が伏せるよりも前にそれを行つた為、辺りに颶のようの一陣の

風が吹き荒れて、彼女は風圧に曝されてのけ反りかけてしまう。――

咄嗟に交差した腕で身を固めて、凌いだようではあつたが――「さあて、やるか……！お父さんとの特訓の中で威力を増して、一段階レベルアップしたコイツを喰らわせてやる！」

轟々と燃える烈火のような白いオーラを纏つた悟飯が、両掌の手根を合わせる。そして……。

「超……か……め……は……め……！」

十八番である必殺技の名を一語一句、丁寧に発しながら腰の辺りまで引いていく。同時に、掌と掌の間には眩しく輝く太陽のような生命の輝きが蓄積して、蒼く光り輝く球体を作り上げた。

エネルギーが溜まりきった瞬間、目を見開く。目の前の標的を射殺すかのような霸氣をその目から発しながら、彼は叫んだ。

「波アアアアアッ！！」

天高く轟く咆哮!同時に凄絶なる生命の奔流が解き放たれて、閃光のようにOPに迫る。そして、その上半身を呑み込んだ閃光は、遙か上空に飛んでいき――雲を焼き払いながら爆ぜた。

「ほ、本当にOPを破壊した……！」

その瞬間を偶然にも刮目した尾白は、唖然として呟く。

「す、すつごい……」

その瞬間を一番近くで目に焼き付けた少女は、目を輝かせながら、自分もいつかはあんな輝きを放つのだと誓つた。

「ふうつ……」

火花のように悟飯の纏つていたオーラが弾け、構えを解くと同時に息を吐いた瞬間……。

『試験……終了っ!!』

雄英高校ヒーロー科の実技試験は終わりを告げたのであつた。